

第3章 考察と調査成果のまとめ

第1節 非ロクロ土師器の変遷

1 時期区分

今回鴻ノ巣遺跡第7次調査地点では、3a層から5a-7層までの地層で検出された遺構からは、南小泉式（氏家：1957）から国分寺下層式（氏家：1967）までの非ロクロ段階の土師器が多数出土した。出土土師器及びその出土遺構については、検出層位・遺構の特徴・遺構の重複関係および出土土師器の特徴によりⅠ期からⅤ期の5時期の変遷を想定することができた。Ⅰ期はさらに3段階・Ⅳ期は2段階・Ⅴ期は3段階に細分することが可能である。

なお、本文では、土師器の変遷を理解し易くするために、扁平な球形の体部に外傾する口縁が付く中小の壺については、第230図のように器高及び体部径とも12cmを境として法量の分布に区分が可能であることから、器高及び体部径が12cm未満のものを小型壺、12cmを超え、概ね18cm未満のものを中型壺と呼称した。また、第231図1・2のような鉢や碗と呼ばれる器種や、坏形土器のうち深さがあるために碗と

と呼ばれるものを含めて、小型の坏および碗状のものは、類似した用途を想定して全てを坏と呼称した。第239図15のように器高の割に体部径・口径が広く、全体に大型の甕については広口甕と呼称した。

<時期・段階区分とその基準>

Ⅰ期 = 5b-7層で検出された住居跡のうち煮炊きの施設が炉の段階のもの。及び同期と考えられる遺構と遺物

1段階：甕形の坏の存在・高杯は多数存在・中小壺は小型壺のみ・塩釜式土器の特徴の強い残存

2段階：甕形の坏の退化・高杯は多数存在・中小壺は小型壺のみ・塩釜式土器の特徴の残存と衰退

3段階：甕形の坏の消滅・高杯は多数存在・小型壺が消滅し中型壺に変化・塩釜式土器の特徴の消滅

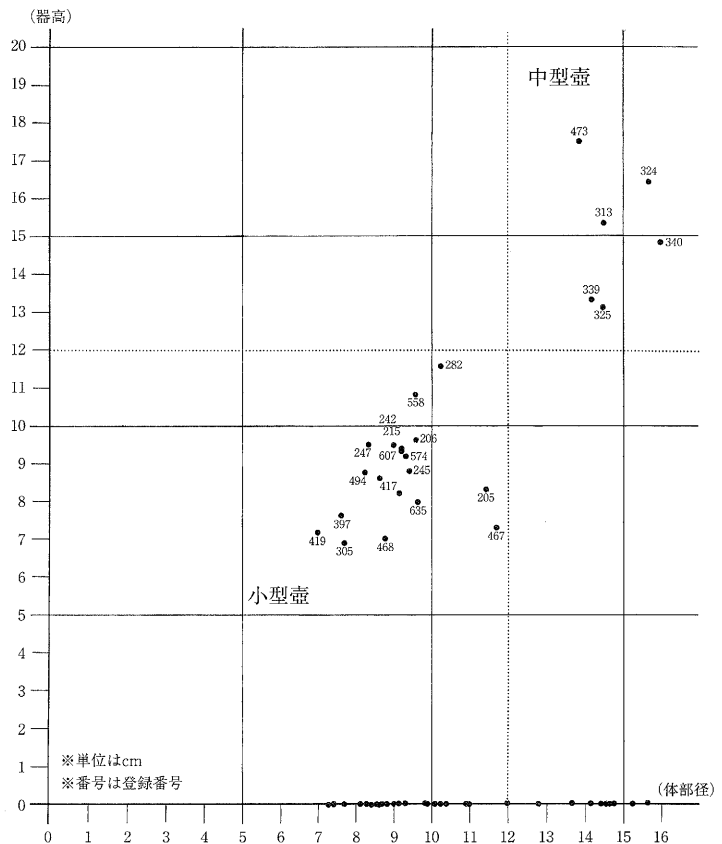
※Ⅰ期については、必要に応じ、1・2段階をⅠ期前半、3段階をⅠ期後半と呼ぶ。

Ⅱ期 = 5b-7層で検出された住居跡のうち煮炊きの施設がカマドの段階のもの。及び同期と考えられる遺構と遺物

：内湾する坏の増加・高杯は減少傾向・中小壺は中型壺のみ・甕に長胴の傾向

Ⅲ期 = 5b-7層の検出遺構のうち、区画施設をもつ集落が廃された段階のSD23溝跡を主とする遺構と遺物

：浅く平底で器壁の薄い坏・高杯の小型化と坏部全面ミガキ・甕類に口唇部が平坦なものの出現



第230図 中小の壺の法量分布図

(Ⅲ～Ⅳ期の中間期の存在) …他遺跡との比較で存在とを相定

(：外面の底部と口縁部の境に段がある坏出現・高杯消滅・鉢形土器出現・長胴甕出現・甗の砲弾形化)

Ⅳ期 = 3 b 層下面から 3 b 層上面で検出された遺構と遺物

1 段階：坏の底部と口縁部の境の内外面に段がついて、幅広の口縁が強く外反し、口縁の傾斜は急・長胴甕の増加・長胴甕の口縁部は幅広で 2 段に外反

2 段階：坏の底部と口縁部の境の段が不明瞭なものが出現・長胴甕の口縁部の幅が狭くなる・甕外面の体部と口縁部の境に段のあるものが出現

(Ⅳ～Ⅴ期の中間期の存在)

(：典型的な栗罎式土器の段階)

Ⅴ期 = 3 a 層上面で検出された遺構と遺物

1 段階：坏の底部と口縁部の境の内外面に段があるが口縁部はやや内弯・甕の外面は体部と口縁部の境に明瞭な段が存在しハケメ調整される。

2 段階：坏の底部と口縁部の境の外面には段があるが内面は湾曲するだけとなり、口縁部はやや内弯する。

3 段階：坏の底部と口縁部の境の段が内外面とも消滅し、全体として浅い半球形の形態となる。

Ⅰ期とⅡ期は同一の検出層位で、直接の重複関係はないが、竪穴住居跡内における煮炊きの施設が炉からカマドへと変化することがこれまでに明らかになっていることから、Ⅰ期が古くⅡ期が新しいと考えられる。Ⅲ期はⅠ期の遺構を切ることからⅠ期より新しい。Ⅱ期とⅢ期も直接の重複関係はないが、Ⅲ期の S D 23 溝跡とⅡ期のカマドをもつ S I 10 竪穴住居跡とは近接しているので同時存在がありえないこと、及び S D 23 溝跡・A S 1 柱穴列とカマドを有する竪穴住居との方向が異なり関連性が認められないから同時期のものとは考えられない。これに加え、Ⅰ期の小型壺からⅡ期の中型壺へ器形変化したと考えられる器種の中小の壺がⅢ期には見られなくなることから、Ⅱ期よりもⅢ期が新しいと考えられる。Ⅰ期～Ⅲ期とⅣ期・Ⅴ期については、検出層位の上下による新旧関係である。細分各段階は土器の形態と器種の組合せの変化による形式的区分である。

各時期・各段階の詳細は次項以下のとおりである。

2 Ⅰ期の土師器

1) Ⅰ期 1 段階

S I 6 竪穴住居跡 4 層・床面・S K 3 土坑からの出土土師器を基準とする。同期としては S I 7・12・17・18 竪穴住居跡・S K 128 土坑・S D 36 溝跡・S X 12 遺構などがある。S I 6 竪穴住居跡は S K 128 土坑を、S K 128 土坑は S I 7 竪穴住居跡を切っているため、Ⅰ期 1 段階とした資料にも時間幅があると考えられる。

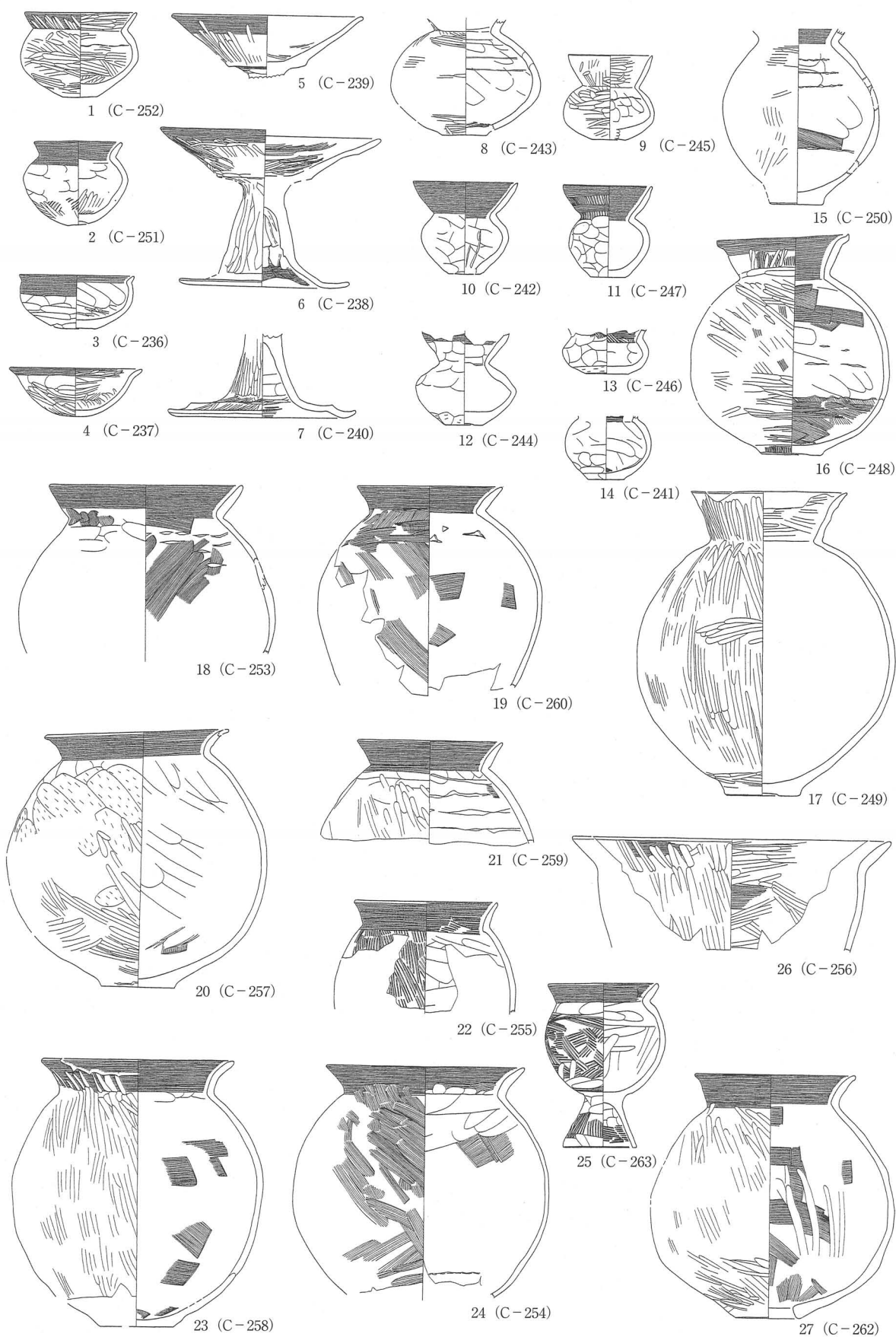
坏 体部がやや扁平な球形で、体部と口縁部の境が強く括れて、甕を小型化したような形態の坏(第231図1・2、第232図1他)はこの段階だけに存在する。内面は、丁寧にヘラミガキされるものの他にナデやヘラナデ調整のものも存在する。平底で底部から口縁部まで湾曲しながら立ちあがり、口縁端部が直立するものや、短い口縁部が外反するものがある。口縁端部が内弯するものや内側に屈曲するものはない。

高杯 坏部は逆台形を呈し、底部と体部の境の外面には明瞭な稜が形成されている。脚部は裾部までラッパ状に広がるもの(第231図6)と、柱状で裾部との境が僅かに括れるもの(第233図21)がある。脚部と裾部との境は強く屈曲して境が明瞭なものが多い。このような形態の高杯はⅡ期まで継続する。

小型壺 この段階では中型壺は存在しない。小型壺は口径と体部径がほぼ等しく、口縁部の高さは体部高の 2/3 程度である。中には口縁部径が体部径より大きなものもある(第231図10・11)。なお、第231図8の壺は、第233図

I
期
1
段
階

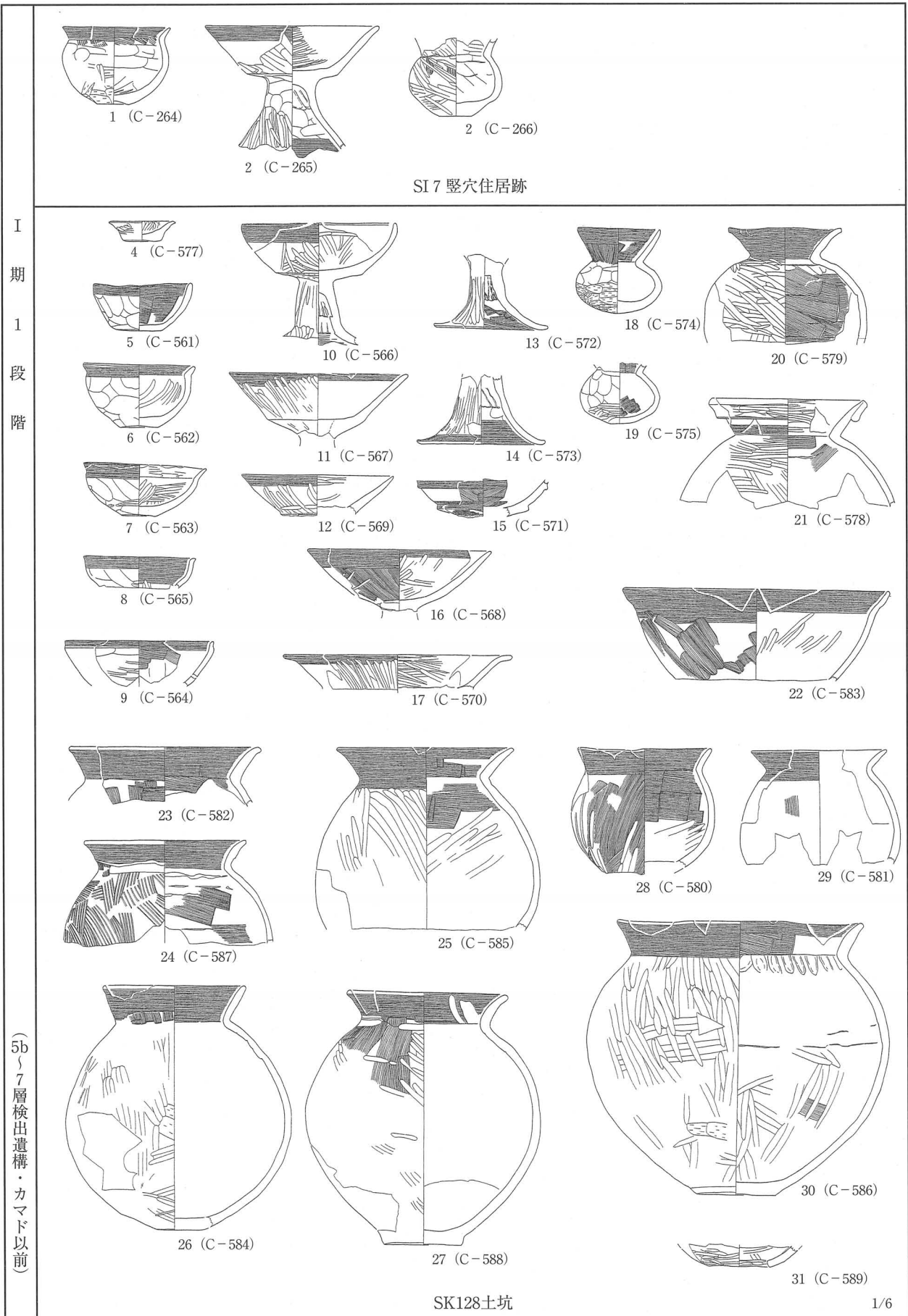
(5b) 7層検出遺構・カマド以前



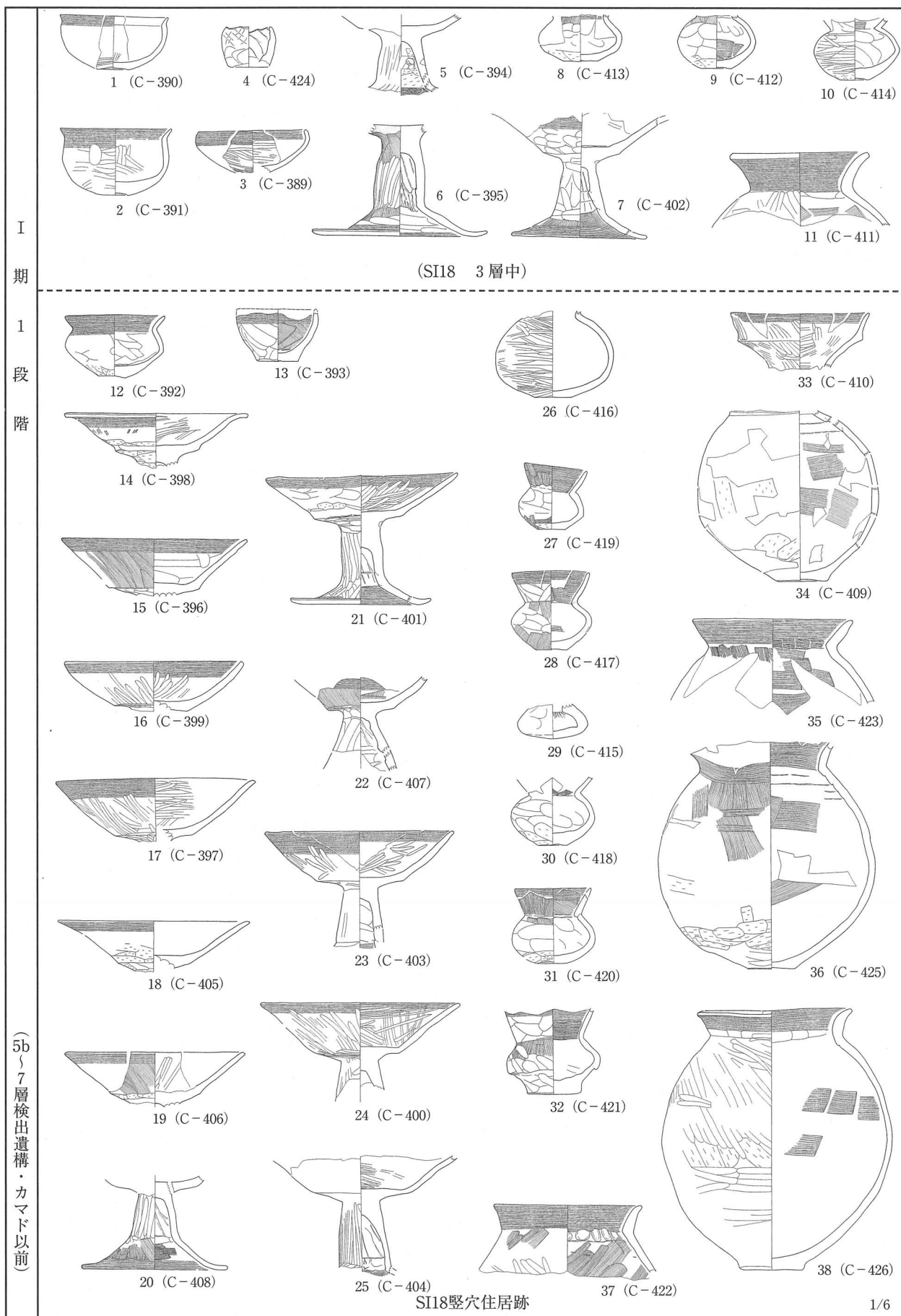
SI 6 竪穴住居跡

1/6

第231図 鴻ノ巣遺跡 I 期 1 段階①

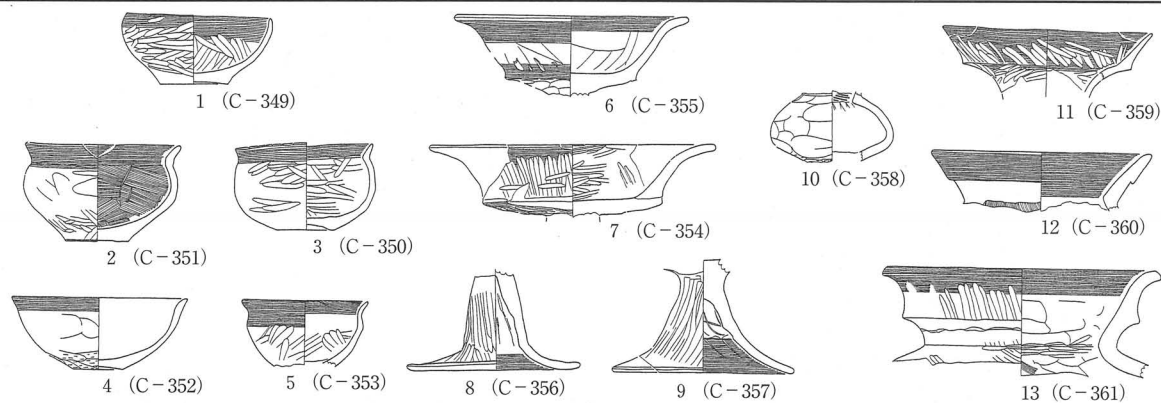


第232図 鴻ノ巣遺跡 I 期 1 段階②

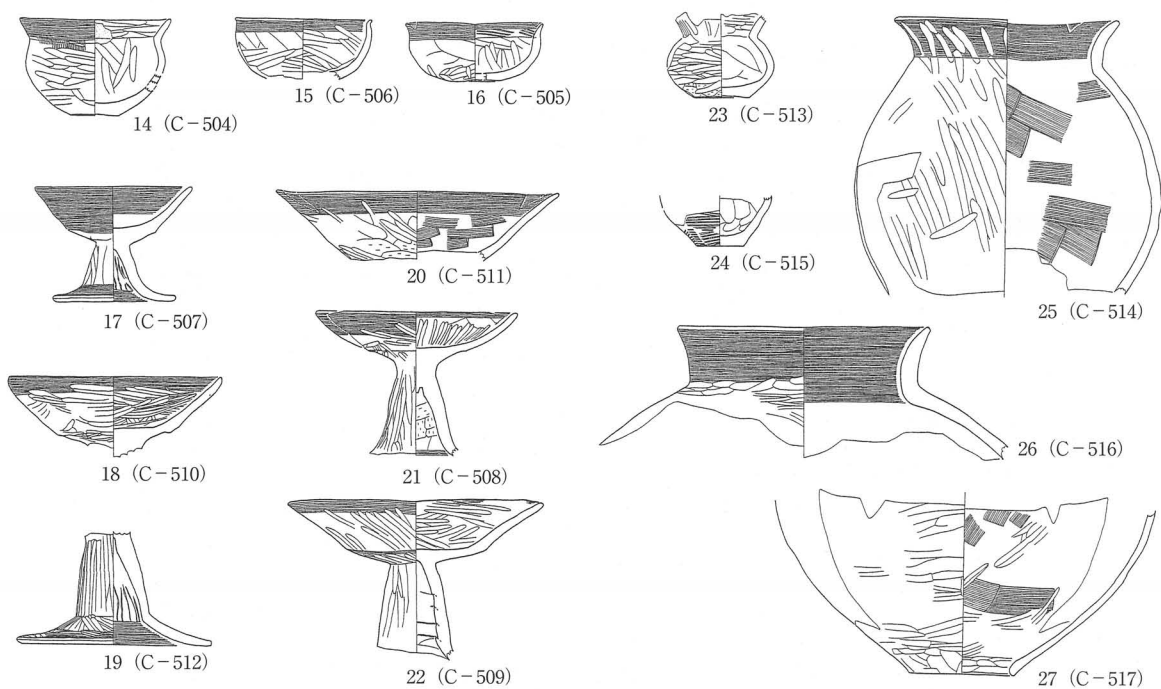


第233図 鴻ノ巣遺跡Ⅰ期Ⅰ段階③

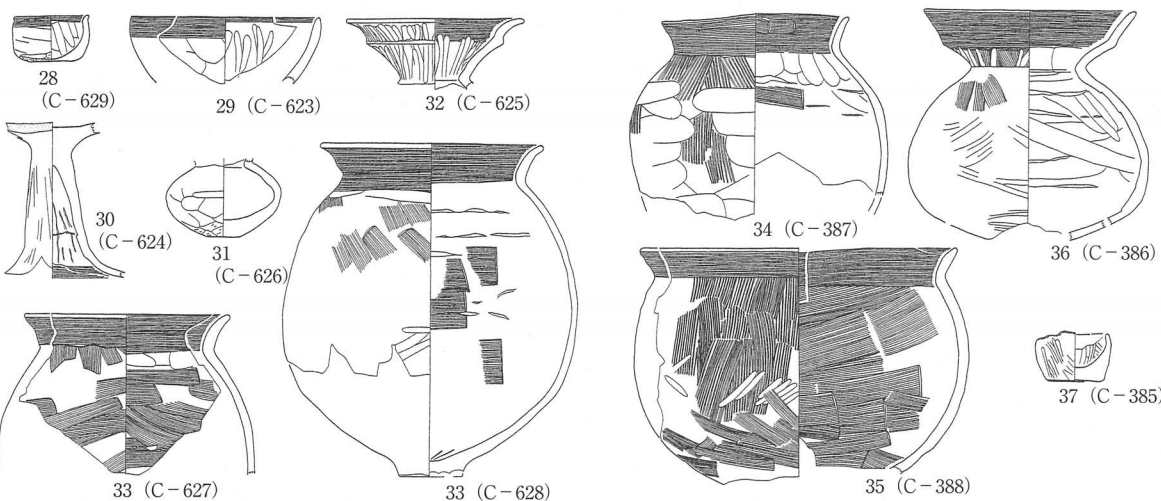
I
期
1
段
階



SI12竪穴住居跡



SD36溝跡



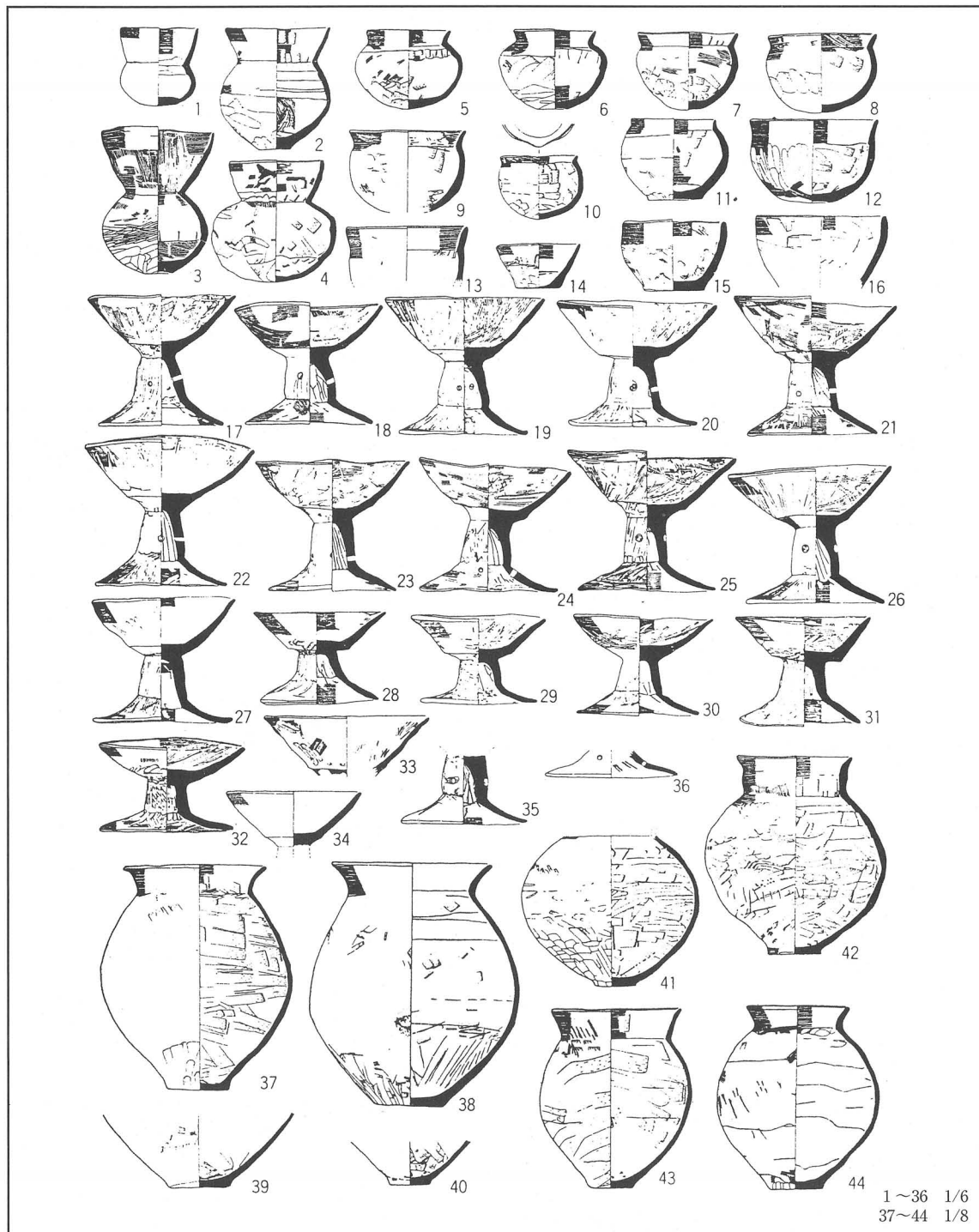
SX12遺構

SI17竪穴住居跡

1/6

(5b) 7層検出遺構・カマド以前

第234図 鴻ノ巣遺跡 I 期 1 段階④



第235図 鴻ノ巣遺跡Ⅰ期1段階の類例：（福島県道南北遺跡1号住居跡）

※辻秀人 1989より転載

26・33、第234図36のように塩釜式から続く有段口縁のもので、Ⅰ期3段階で出現する中型壺とは系統が異なるものと考えられる。小型壺の調整は、体部がナデ及びヘラケズリを基調とするが、部分的にヘラミガキ調整されるものもある。口縁部はヨコナデ調整される。第231図9のように全面がヘラミガキ調整されるものは、前型式の壺形土器の調整技法を踏襲したものと考えられる。

壺 頸部と口縁部が明瞭に分れて口縁部が立ち上がって受け口状になるもの（第233図33、第234図11・36）、口縁部の下端の外面が肥厚して強い稜が形成されるもの（第234図13）端部が折り返されているもの（第232図21、第

234図12)、口縁端部が屈曲するもの(第231図16)、幅が広いく外傾する口頸部のものなど、前型式の特徴を残している壺が多数存在する。壺の器面はヘラミガキ調整されるものが多い。

甕 甕は体部が球形を呈し、口縁部は強く外反する。体部と口縁部の境の内面は角が付いて強い稜が形成されるものが多い。

台付甕 小型のもので、1点だけ出土している。体部は球形で、体部に比較して台部が大きい。1点だけの出土であり、一般的な器種として存在した可能性は低い。

広口甕 大型で、搦鉢状の体部に強く外傾する口縁が付く(第231図26、第232図22)。体部と口縁部の境に括れは認められない。

甗 体部は球形を呈し、体部と口縁部の境は括れて口縁部は外反する。底部は無底である。器形・調整とも甕と類似し、体部だけでは区別できない。

I期1段階の類例としては、福島県道南北遺跡1号住居跡(根本:1982)、多賀城市山王遺跡S X 058遺構(高倉:1991)がある。

2) I期2段階

S I 8 堅穴住居跡からの出土土師器を基準とする。同期としては折り返し口縁の壺または甕が出土しているS I 14 堅穴住居跡、小型壺とS I 8 堅穴住居跡と類似する坏が出土しているS K 132土坑、1段階のS I 18 堅穴住居跡を切り、小型壺が出土しているS D 34溝跡もI期2段階と考えられる

坏 甕を小型化したような坏はなくなり、前段階と比べて器高が低く、体部と口縁部の境は強く括れて口縁は外傾ないし外反するもの(第236図1・2)に変化する。短い口縁部が外反するものや口縁部が直立するものは継続する。口縁部が強く内弯する坏(第236図3・第237図3)はこの段階から出現する。

高坏・小型壺 前段階と基本的に変化は認められない。

壺 頸部と口縁部が分れて口縁部が受け口状のものはなくなる。端部が折り返されたもの(第236図20、第237図6)や口縁部の下端に稜が形成されるもの(第236図19)は残存するが、塩釜式の影響を残すものは減少する。

甕 前段階と大きな変化は認められない。

広口甕 口径は大型化する。体部と口縁部の境に括れが生じ、鉢形の形態から扁平な甕形へと変化する(第236図29、第237図9)。

甗 点数は少ないが1段階同様の無底で体部が球形の甗(第236図30)のほか、鉢形と考えられる底部孔の小さなもの(第236図31)も出土している。

片口土器 体部と口縁部の境がわずかに括れ、口縁部は外傾する。片口の部分の僅かに高くなる。1点だけの出土である。

I期2段階の類例としては、南小泉遺跡第30次調査S I 16 堅穴住居跡(工藤・渡部・根本:1998)などがあるが、I期1段階とI期2段階とを区別できるだけの資料がまとまって出土していない遺構が多い。このため、I期1段階とI期2段階のどちらに対応する遺構・遺物であるかの判断は困難な場合が多い。

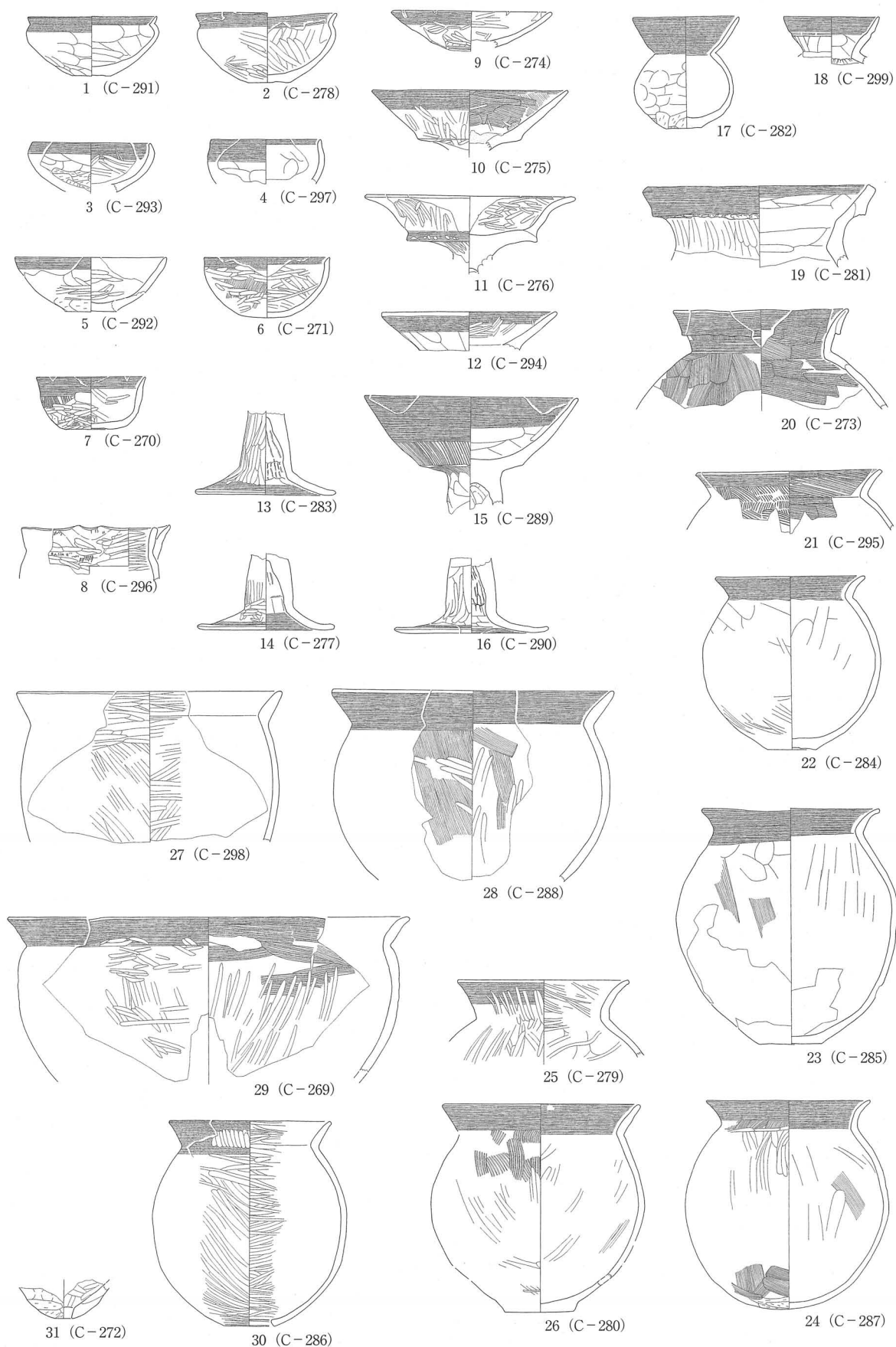
3) I期3段階

S I 11 堅穴住居跡出土土師器を基準とする。中型壺が出土し、前段階に成立した形態の広口甕が出土したS I 9 堅穴住居跡の床面と3層出土土師器も同期の可能性が高い。

坏 この段階に属する坏の資料は少ない。短い口縁部が外反するもの(第238図2)、口縁部が直立するもの(第238図1)、口縁部が強く内弯するもの(第239図6・7)がある。

I
期
2
段
階

(5b
～
7
層
検
出
遺
構
・
カ
マ
ド
以
前)

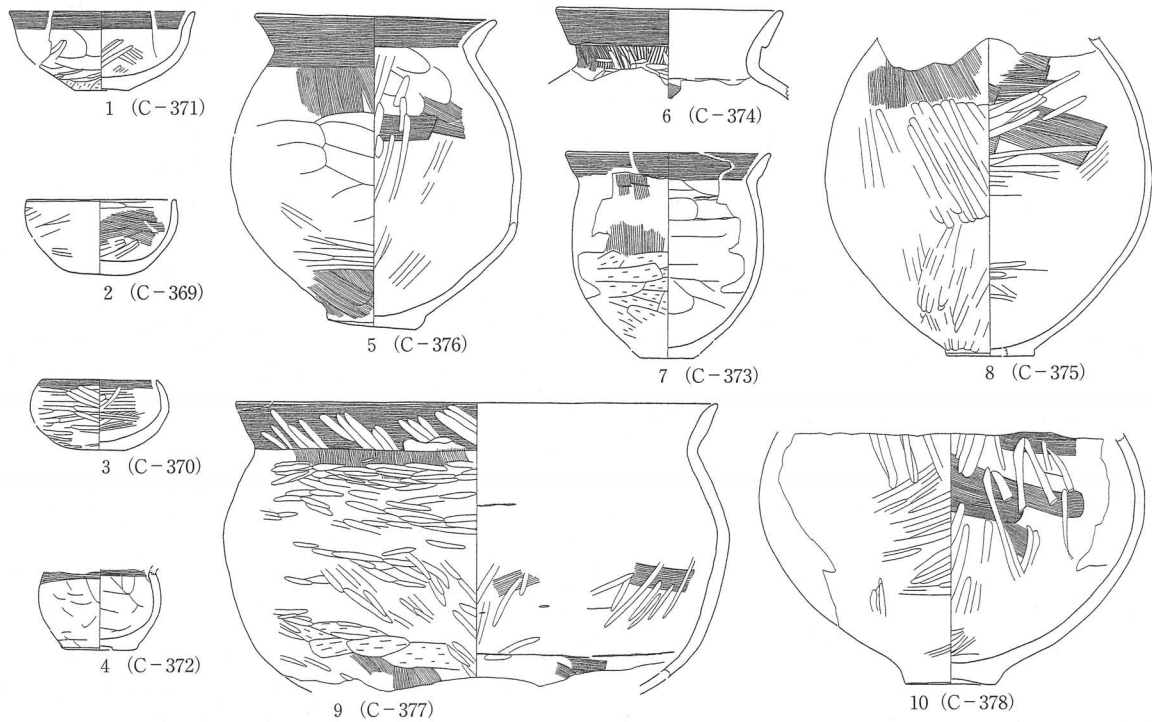


SI 8 竪穴住居跡

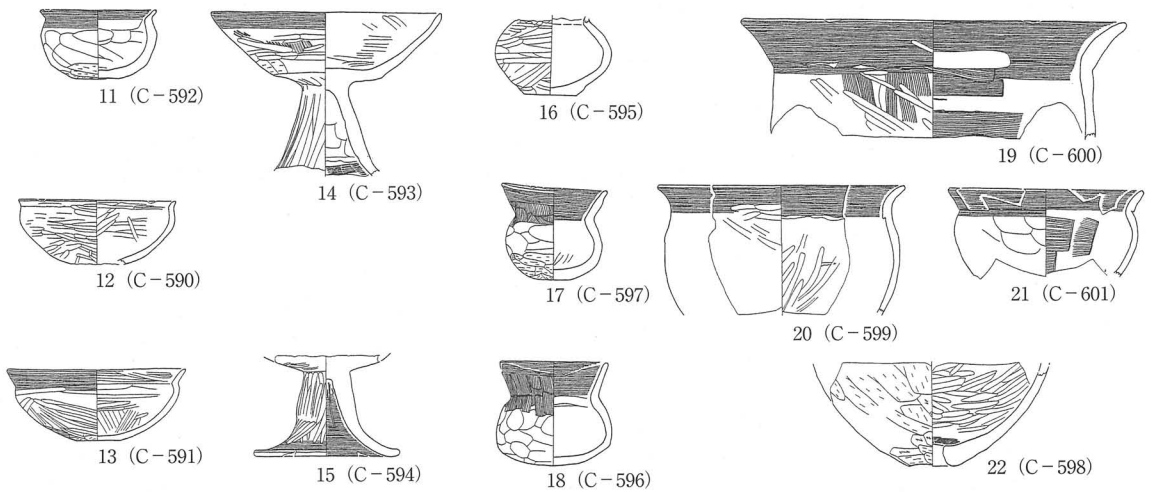
1/6

第236図 鴻ノ巣遺跡 I 期 2 段階

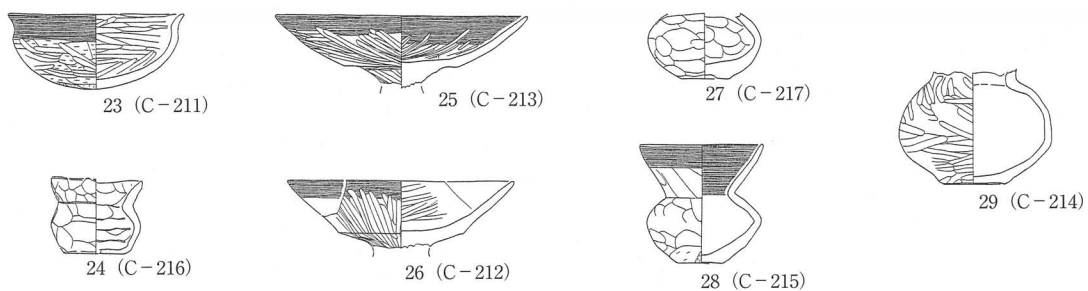
I
期
2
段
階



SI14竪穴住居跡



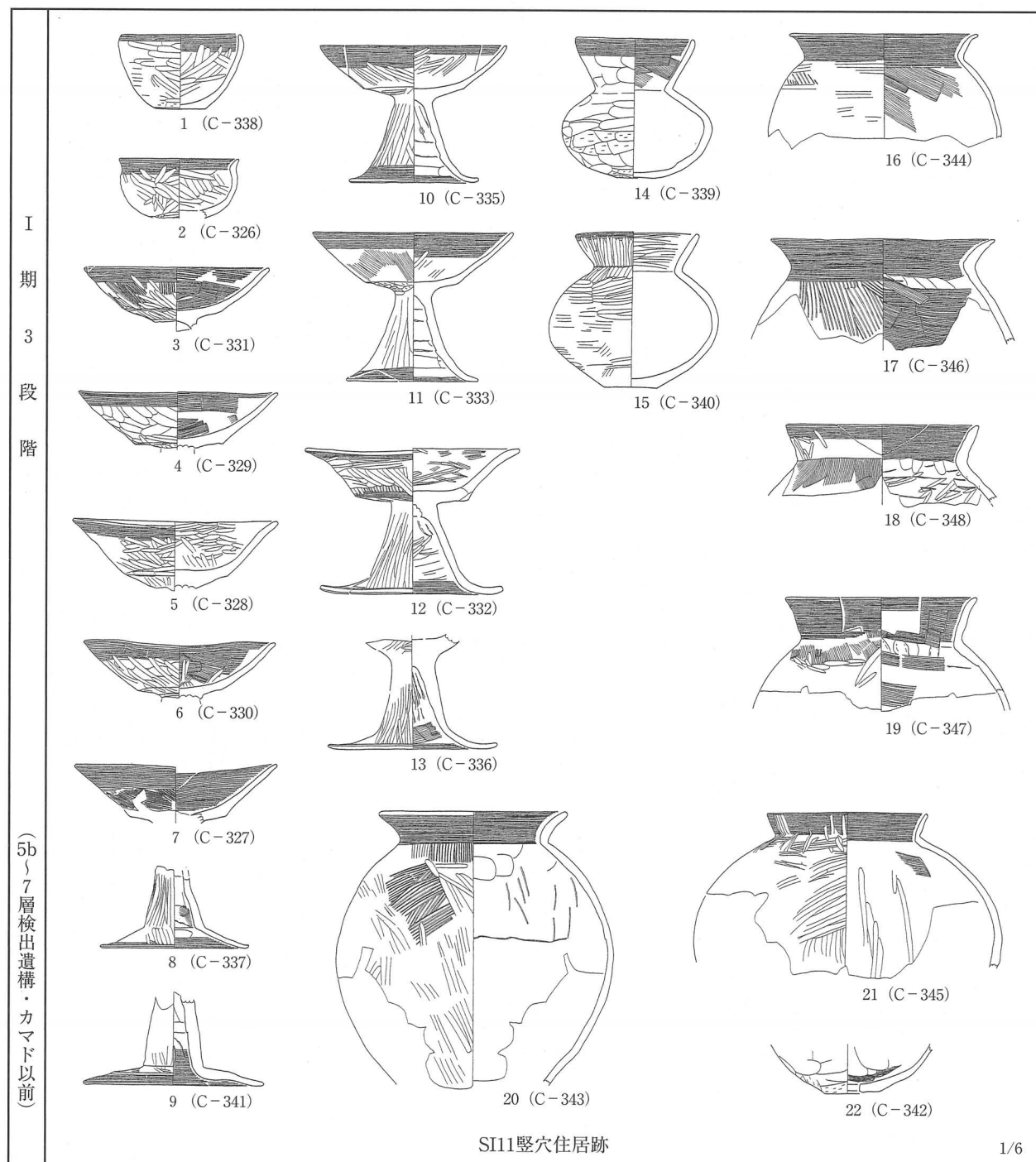
SKI32土坑



SD34溝跡

1/6

第237図 鴻ノ巣遺跡 I 期 2 段階 (同期項)



第238図 鴻ノ巣遺跡Ⅰ期3段階

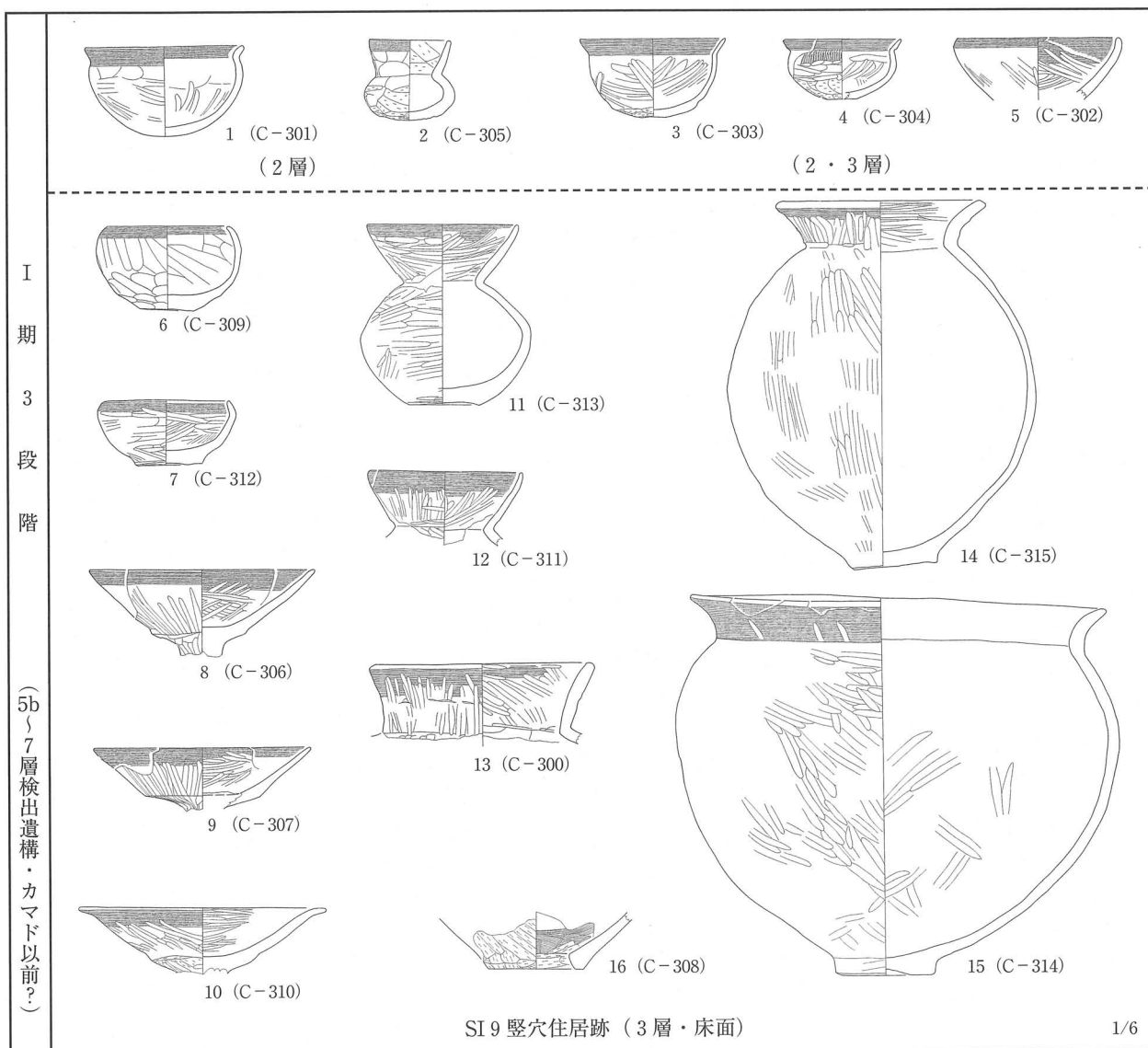
高坏 前段階と大きな変化は認められない。

中型壺 小型壺が消滅し、中型壺に変化する。この段階の中型壺は口径が大きく、体部径に比して口径が $2/3$ 以上ある（第238図14・15、第239図11）。また口縁の高さも高い（第238図14、第239図11）。器面の調整はヘラミガキが多用されるようになる。

壺 口縁部が肥厚して下端に稜が形成されるものや、端部が折り返されるものはなくなり、塩釜式の影響は認められなくなる。この時期の壺は、やや縦長の体部に外反する単純な口縁のもの（第239図14）となる。

甕 球形の体部のものもほかに、体部が縦に長い球形を呈するもの（第238図20）が見られるようになる。

広口甕 器高が高くなり、体部と口縁部の境が強く括れたもの（第239図15）が出土している。



第239図 鴻ノ巣遺跡Ⅰ期3段階（同期項）

甕 体部が球形で丸底風の底部に小さな孔があくもの（第238図22）と無底のもの（第239図16）がある。

Ⅰ期3段階の類例としては、多賀城市山王遺跡第12次調査SⅠ5287住居跡（千葉：1992）などがある。

3 Ⅱ期の土師器

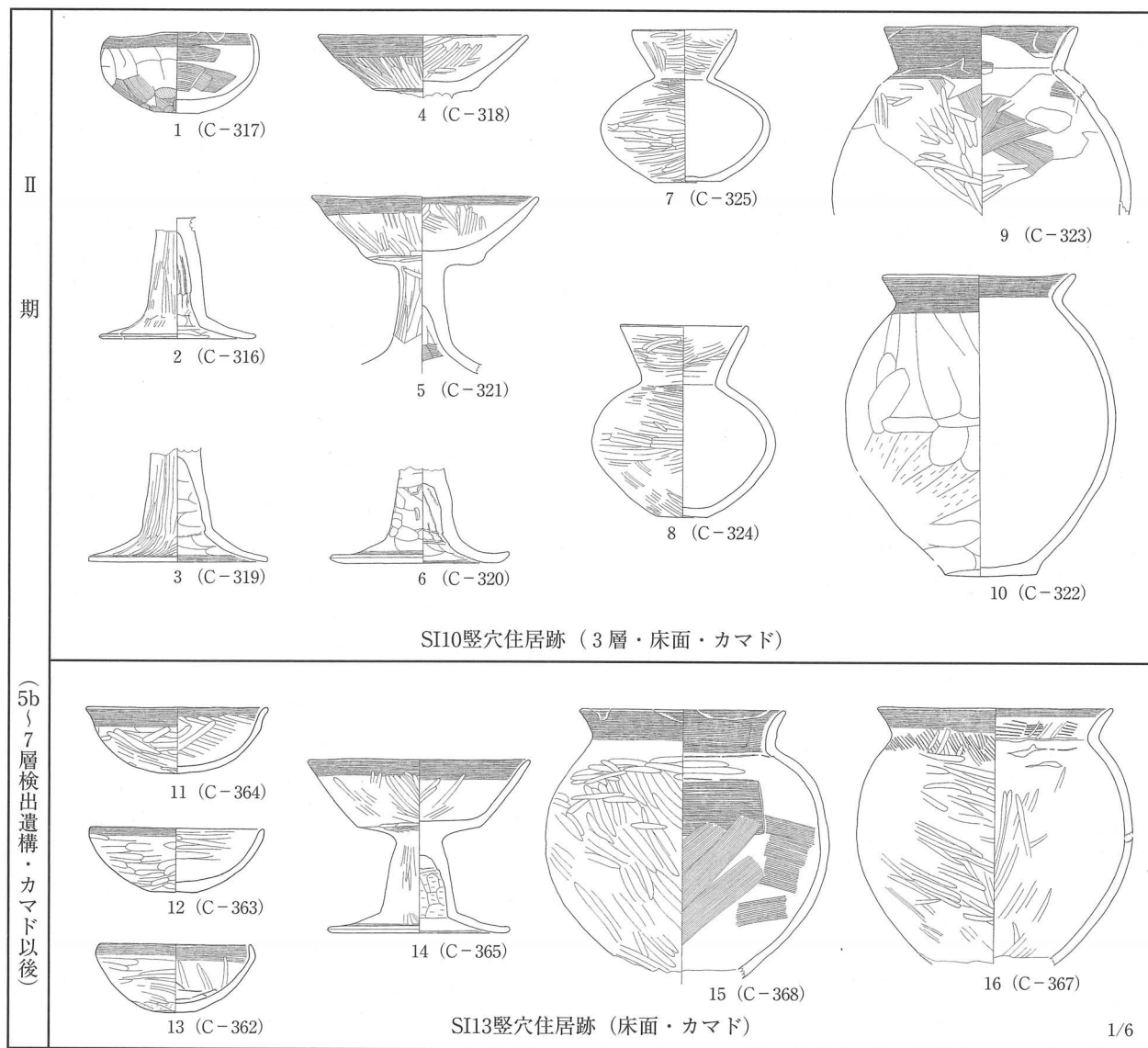
カマドをもつSⅠ10・13竪穴住居跡及び宮城県教育委員会が昭和48年に調査した1号住居跡出土土師器（加藤・白鳥：1974）を基準とする。

坏 体部と口縁部の境が僅かに括れ、短く口縁部が外反するもの（第240図11、第241図1・2）、半球形の体部に短い直立する口縁となるもの（第241図3～6）、底部から口縁部まで半球形に立ち上がるもの（第240図12）、口縁部が強く内弯するもの（第240図1）、口縁部が内傾するもの（第240図13）などバラエティーに富んでいる。

高坏 前段階と大きな変化は認められない。

中型壺 前段階に比べて口径が小さくなる。また調整はミガキがさらに徹底し、口縁端部まで磨かれている。

甕 甕は縦に長い球形呈するもの（第240図10、第241図14）と球形のもの（第240図15・16）とがある。体部が縦長・球形に係わらず、体部の上部に最大径をもち肩部に張りのあるもの（第240図10・15・16）が多い。宮城県教



第240図 鴻ノ巣遺跡Ⅱ期①

育委員会調査の1号住居跡から甕とされた長胴の土師器（第241図13）が出土しているが、この器種はⅢ期以降に継続するかどうか不明である。

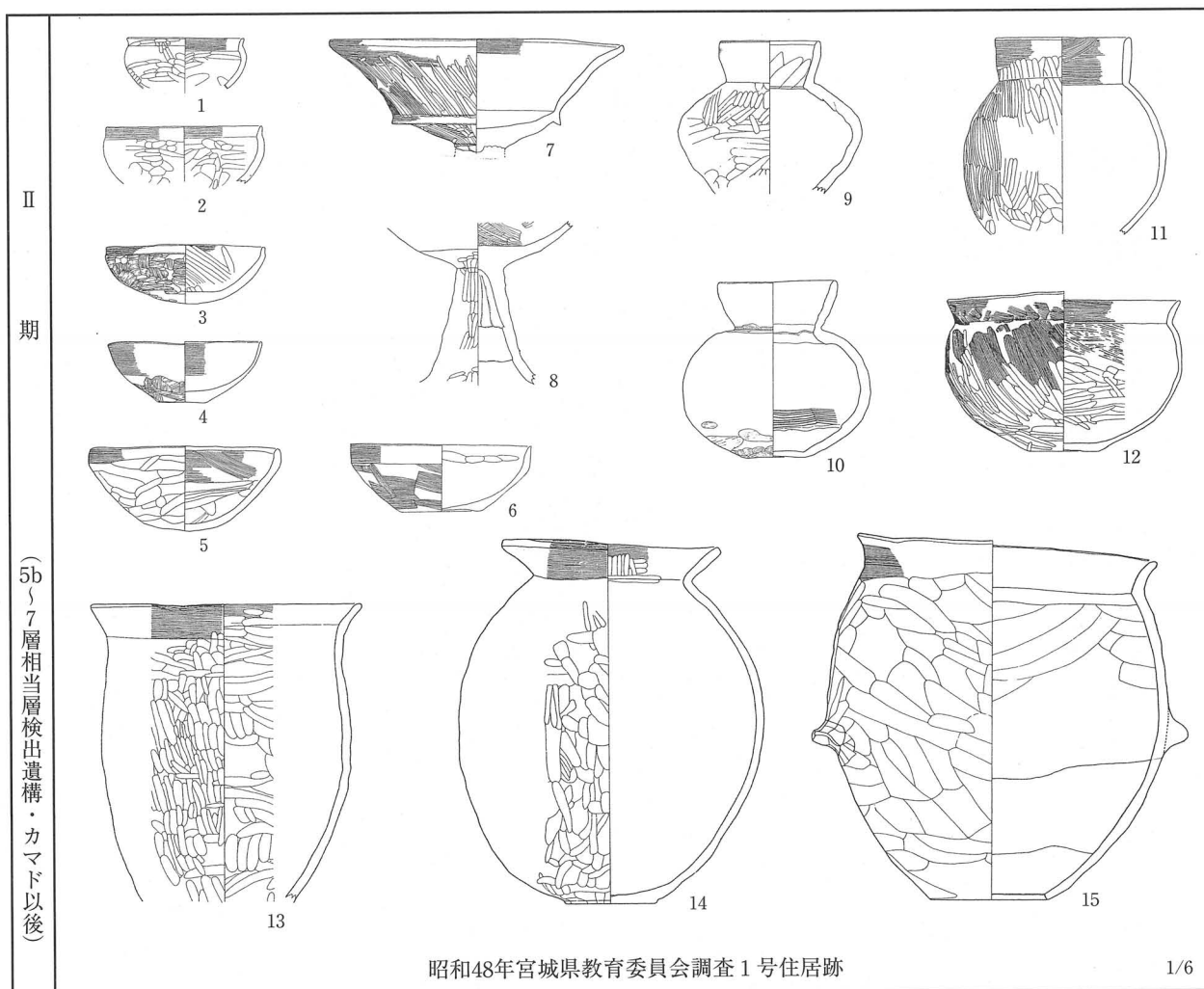
甕 体部に丸みがあるが、全体として長胴化の傾向が認められる。

Ⅱ期の類例としては、南小泉遺跡第26次調査S I 5 竪穴住居跡（五十嵐：1998）、多賀城市山王遺跡町地区S I 3012住居跡（村田他：1998）がある。

4 Ⅲ期の土師器

S D23溝跡A期1・2層出土の土師器を基準とする。Ⅰ期1段階からⅡ期の集落を囲むS A 2柱穴列を切り、S D23溝跡A期出土土師器坏と同様の坏を出土しているS I 15竪穴住居跡もこの時期と考えられる。

坏 前段階同様に半球形の体部に直立・内弯・内傾・括れて外傾する器形でやや厚手のもの（第243図1～7）のほか、平底風の丸底で薄手のもの（第243図8～13、第244図1）がまとめて出土している。後者には底部から口縁まで内弯気味に立ち上がるものと、体部と口縁部の境が僅かに括れて端部が外反するものがある。



第241図 鴻ノ巣遺跡Ⅱ期②

高坏 この段階でも高坏は一定量出土している。前の時期までと比べると器形に大きな変化はないが、全体に小型化している（第243図14～20）。脚部は坏部との接続部から裾部までラッパ状に広がり、裾端部は上方に捲れ上がっている。坏部外面は横方向のヘラミガキ調整が行われ、坏部全体がヘラミガキ調整されるようになる。

中型壺 この時期になると中型の壺は消滅する。

壺 壺の形態は不明である。壺については、この時期以後一定の形態をした独立した器種として普遍的に存在するかどうか不明である。

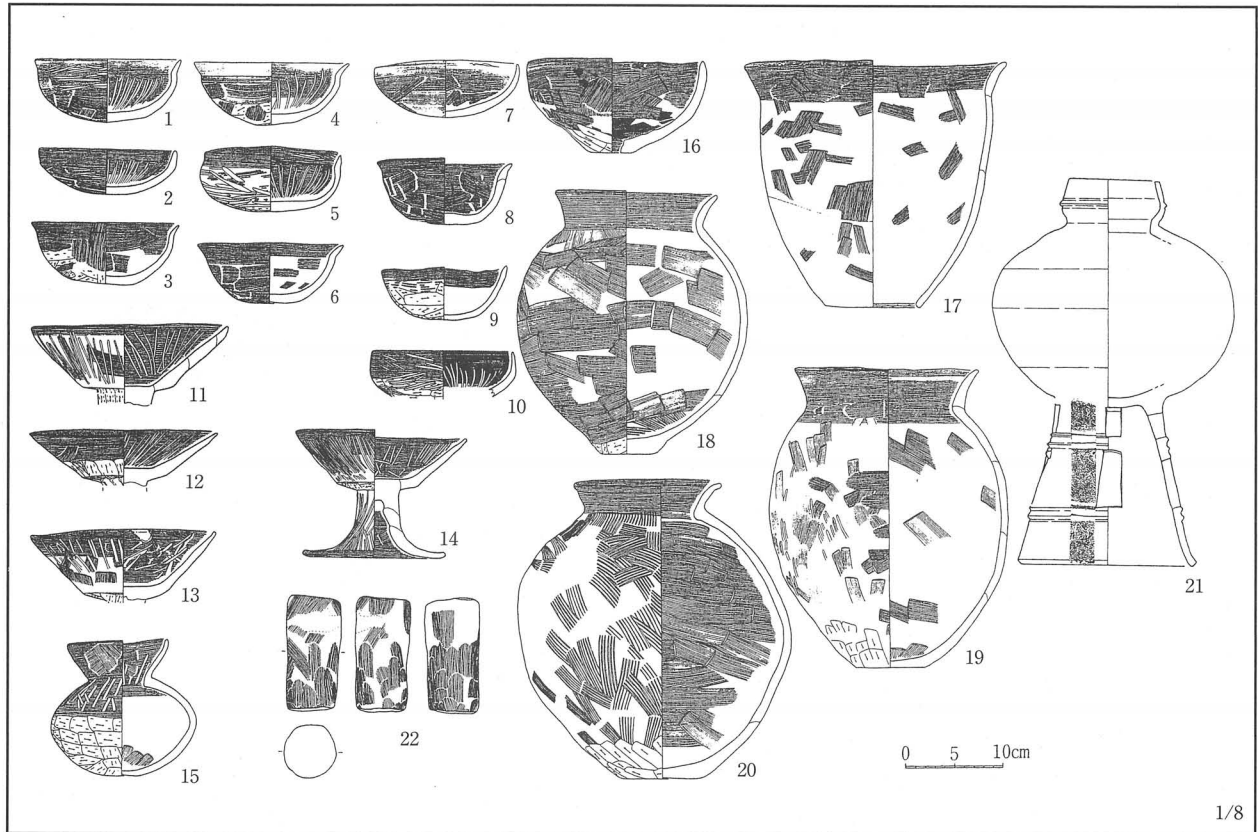
甕 前段階の影響を受けて、縦に長い球形呈し、体部の上部に最大径をもち肩部に張りがあるもの（第243図23・25～27）が一般的である。この段階になると、甕の口縁部には口唇部が平坦なもの（第243図22・23、第244図5）が出現する。

鴻ノ巣遺跡では、この時期を層位的・器種組成の変化・器種の特徴の変化によって特定できるが、他遺跡でⅢ期段階の類例の指摘は困難である。

Ⅰ期からⅢ期を通じ、坏類には平底のものと丸底のものが混在している。

5 Ⅲ期とⅣ期の中間期

鴻ノ巣遺跡のⅢ期とⅣ期の土師器には、器形や器種組成に大きな差異があり、遺跡に空白期が存在した可能性が



第242図 鴻ノ巣遺跡Ⅱ期の類例：(南小泉遺跡26次調査SI5)

考えられる。この間に相当する土師器群を、遺物の年代と型式の特徴から市内の遺跡で想定すると、土手内遺跡の S I - 4・8 住居跡（熊谷・主浜：1992）と富沢窯跡第2次床面（渡辺他：1984）出土土師器があげられる。

坏 I 期1段階から見られる半球形の体部で、体部と口縁の境が括れて短い口縁が外反するもの（第245図1～6・18、第246図3～5）、体部から口縁まで内弯気味に立ちあがるもの（第245図8～11）、短い口縁が内傾ないし外反するもの（第245図20・21、第246図2）などが主流を占めるが、この時期に外面の体部と口縁部の境に段がついて、これまでと比べて幅が広く直立ないし僅かに内弯する口縁部の坏（第245図7・19、第246図1）が出現する。

この段階の坏は丸底のものが多く、小さな平底のものは稀（第246図5）になる。

高杯 この段階では高杯は基本的に消滅する。

鉢 甕と坏の間中間的な大きさの器種の鉢が出現する（第245図15・22～26、第246図6～8）。鉢は、一般的に器高よりも口径が大きい。この段階の鉢には、体部が球形の甕を小型化したようなもの（第245図22・23）、胴長の甕の小型化して胴を短くしたようなもの（第245図25・26、第246図6・7）、搦鉢状のもの（第245図15・第246図8）など様々な形態のものがある

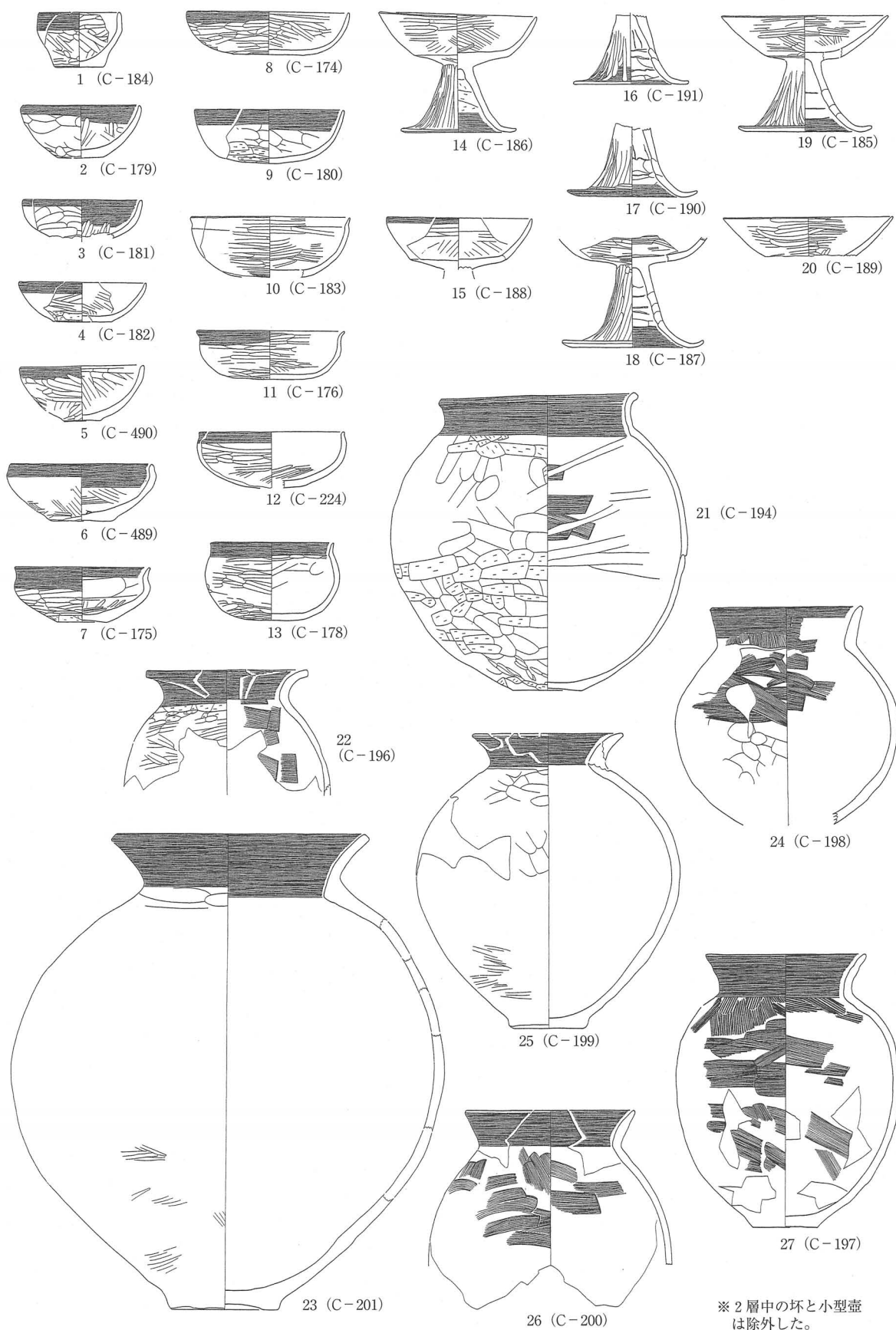
甕 体部が球形のもの（第245図13・27・28・31）のほか、胴長のもの（第245図32）がある。口唇部が平坦に仕上げられるものは前段階から引き継がれ（第245図27・28）、この時期以降も継続して出現する。

甑 縦長の搦鉢状の体部に外反する口縁の付く砲弾形の無底単孔の甑（第245図16）がある。I 期からⅡ期までの球形を基調とする器形から、長胴の鉢形の器形へと変化している。

Ⅲ期とⅣ期の中間期の類例としては、名生館遺跡 S K 430 土坑（白鳥・後藤：1986）・山前遺跡第23住居跡（宮城県文化財保護課：1976）などがある。

III
期

(5b) 7層検出遺構・集落以後

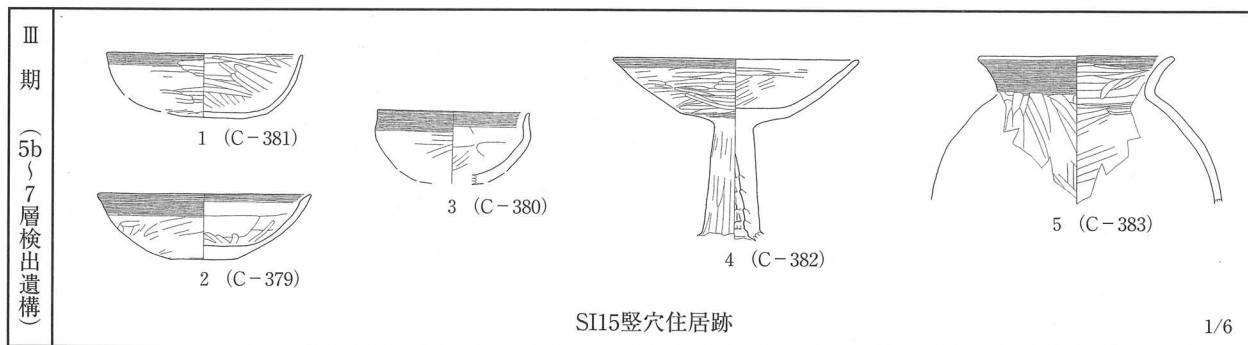


※ 2層中の坏と小型壺
は除外した。

SD23A溝跡 (1層)

1/6

第243図 鴻ノ巣遺跡III期①



第244図 鴻ノ巣遺跡Ⅲ期②

6 IV期の土師器

1) IV期1段階

3 b層除去後に検出され、3 b層類似の土壌によって埋っていたSR 3 bの底面と3層からの出土土師器、及びSI 5 竪穴住居跡1・2層出土土師器を基準とする。

坏 坏はいずれも丸底で、底部から体部と口縁部にかけての立ちあがり部分が直立し、口縁端部が外反して非内黒のもの（第247図1：1類）、半球形の底部と口縁部の境の内外面に段が付いて口縁部が直立し、内面黒色処理されるもの（第247図2：2類）、浅い半球形の底部と口縁部の境の内外面にクランク状の明瞭な段が付いて断面形が柳葉状の口縁部が強く外反し、内面黒色処理されるもの（第247図11～13：3類）、大型で半球形の底部と口縁部の境の内外面にクランク状の明瞭な段が付いて柳葉状の口縁部が強く外反し、内面黒色処理されるもの（第247図14：4類）、大型で浅い半球形の底部と口縁部の境の内外面にクランク状の明瞭な段が付いて口縁部が強く外傾し、非内黒のもの（第247図15：5類）の5種類がある。

高杯 高杯は出土していない。

鉢 底部から口縁部まで内弯気味に立ちあがり、口縁部は外反する。器高に比して口径が大きい（第247図4）。

甕 長胴系の甕が4点（第247図5～7・16）出土している。いずれも口縁部の幅が広く、体部との境目から一度直立ないし外傾気味に立ち上がったのち、上半部が外反する。甕の体部と口縁部の境の外面には段は形成されていない。胴部が球形を呈するものも存在したと考えられるが、今回の調査区から良好な資料は出土していない。

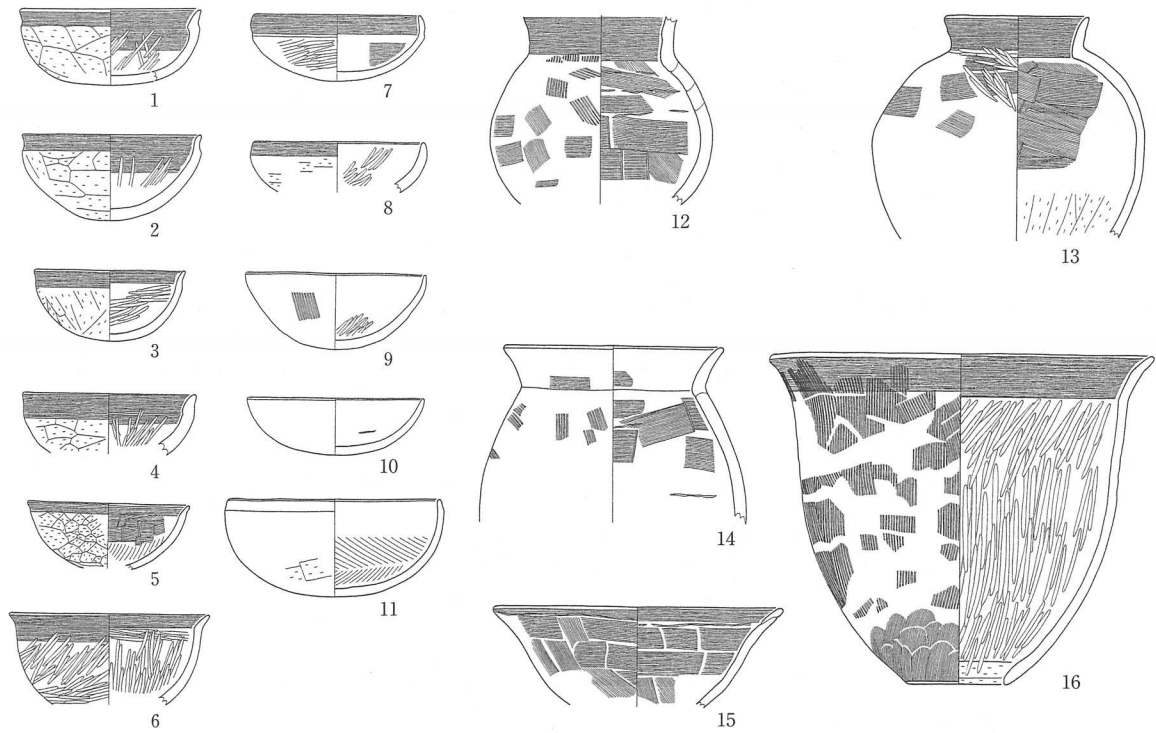
甗 小型と大型の2器種がある。小型の甗は、鉢のように台状の底部から口縁部との境まで内弯気味に立ちあがり、口縁部は外反し、底部中央に小孔のあけられた有底単孔のもの（第247図8）である。大型の甗は、無底単孔の砲弾形のもので、体部と口縁部の境が括れるもの（第247図9・17）と、括れがなく深鉢状のもの（第247図10）とがある。甗の体部と口縁部の境の外面には、段は認められない。

その他、小さな円筒形のミニチュア土器（第247図3）が出土している

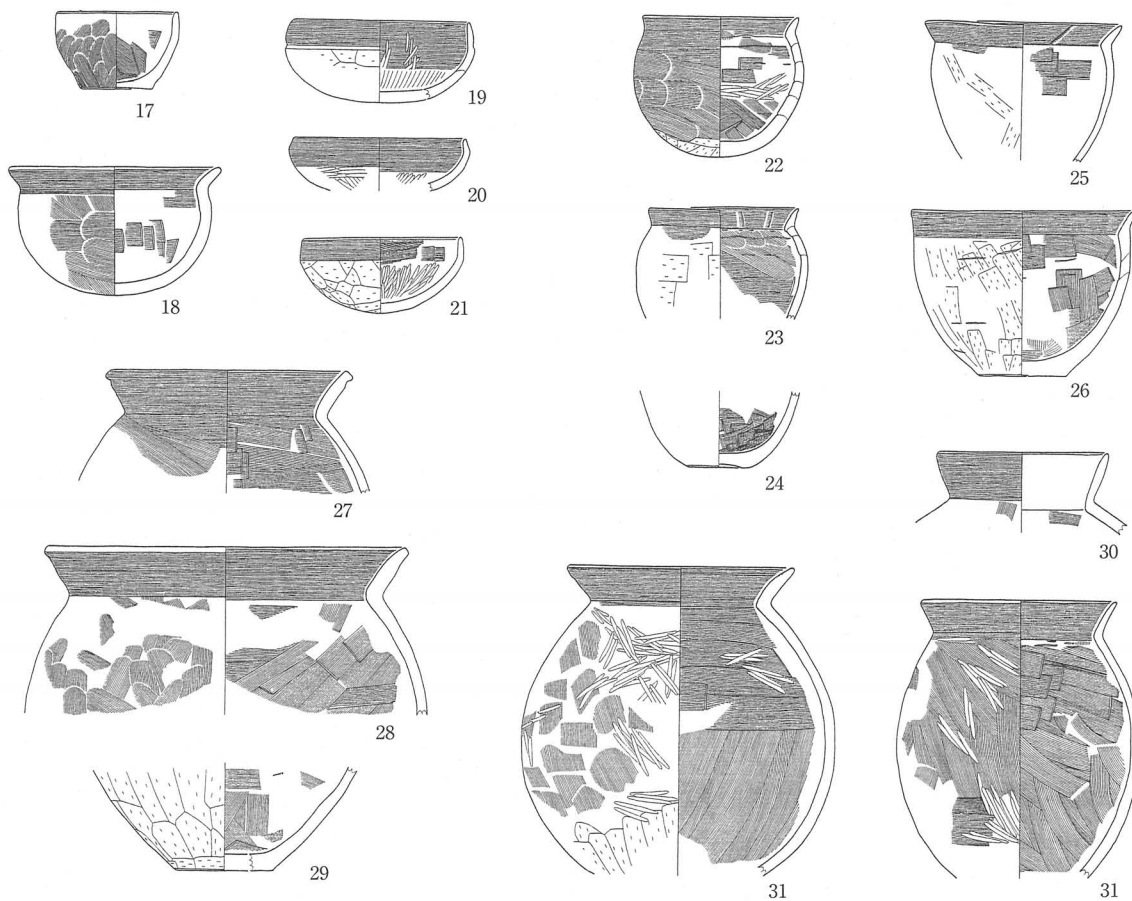
IV期1段階の類例としては、角田市住社遺跡第1号住居跡（斎藤：1997）・住社遺跡昭和30年出土資料（志間泰治：1958）などがある。

2) IV期2段階

3 b層に埋没した3 b層土器群と、3 b層から掘り込まれたSR 3 a溝跡及びSX 3 a土坑出土土器を基準とする。3 b層に埋没していた3 b層土器群と、3 b層上面で遺構の輪郭が検出されたSR 3 a溝跡・SX 3 a土坑とでは、層位的には前者が古く後者が新しいと考えられるが、土器の特徴から時間差を読取ることができないので、



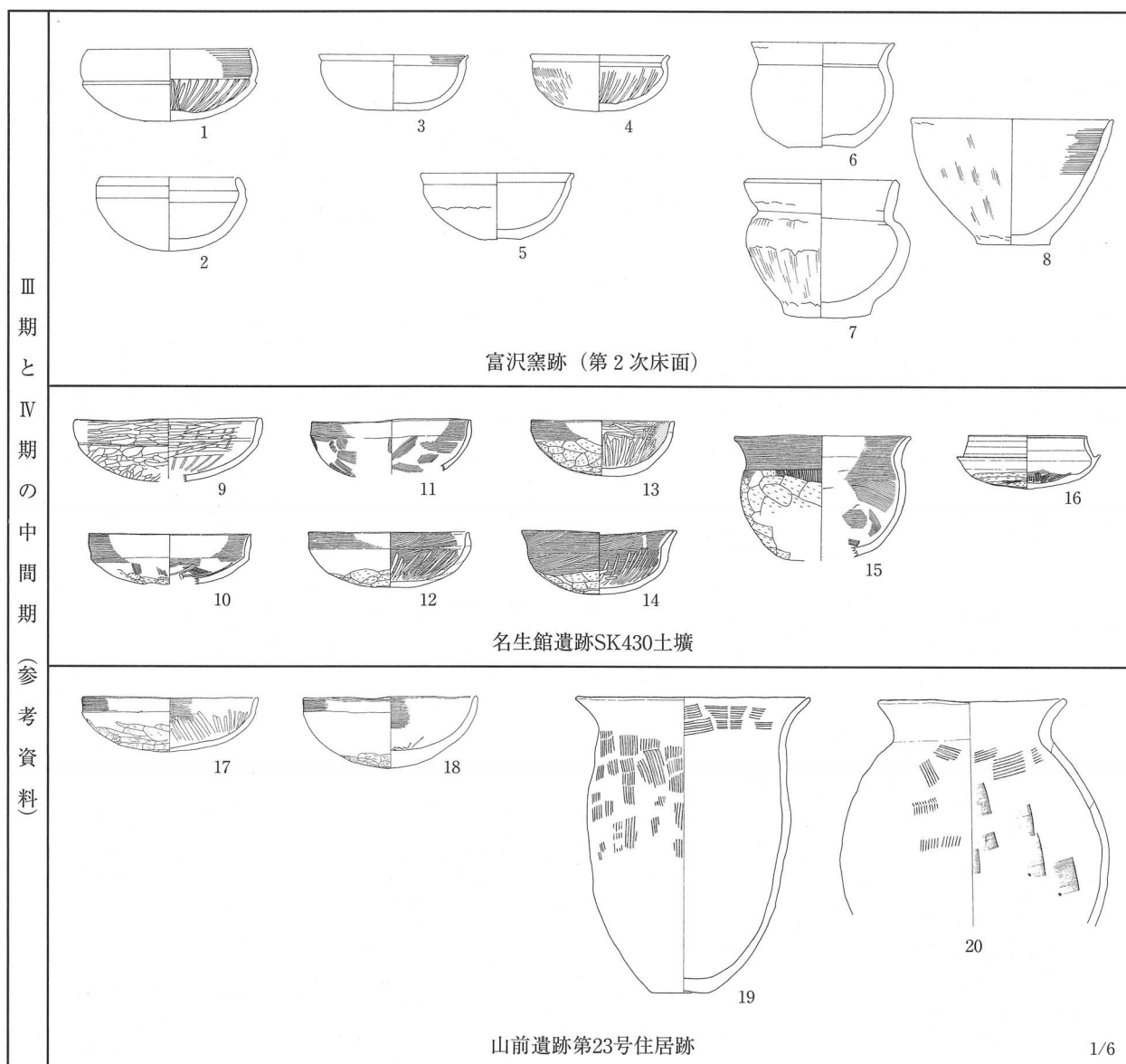
土手内遺跡SI 4 住居跡



土手内遺跡SI 8 住居跡

1/6

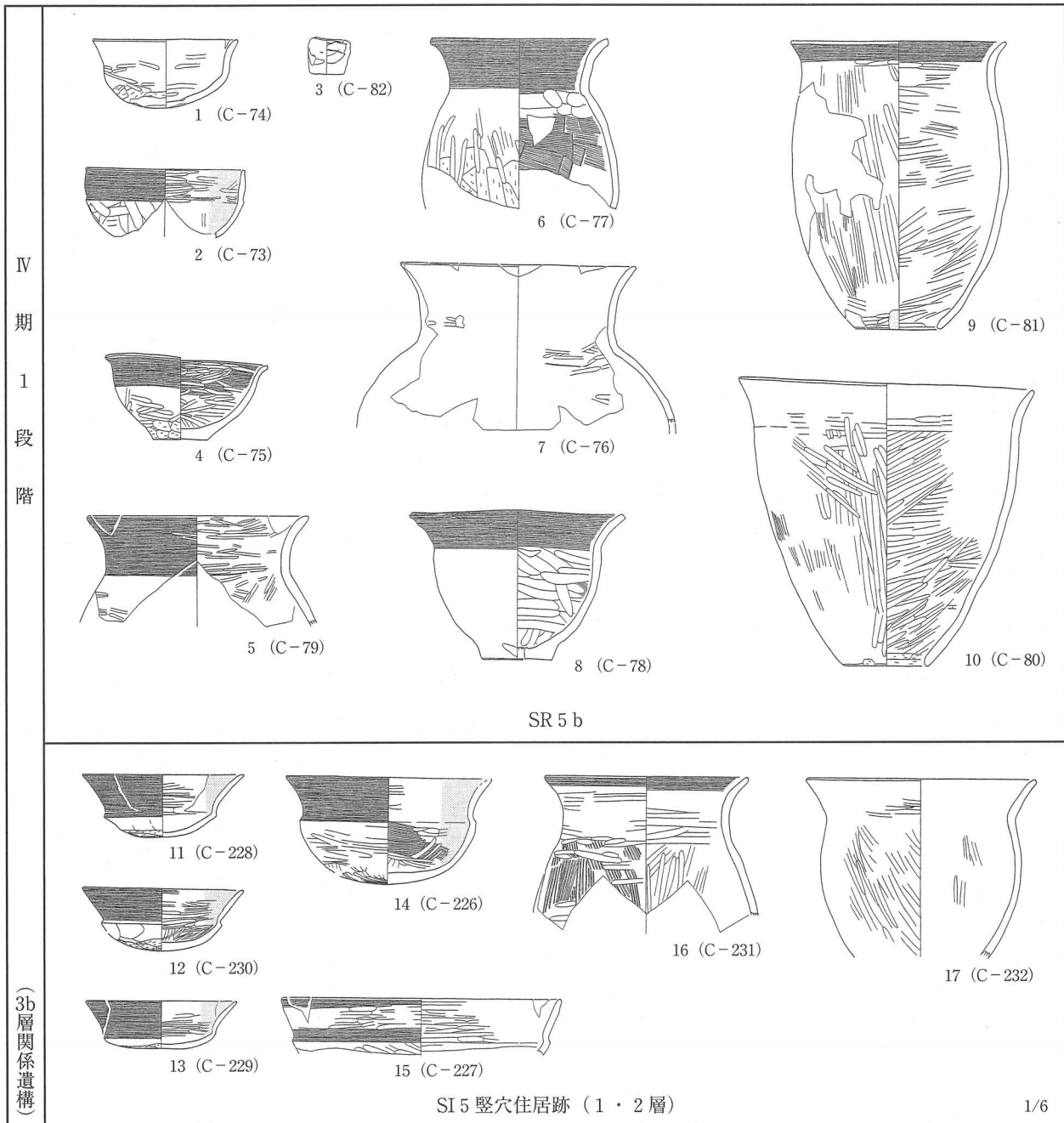
第245図 鴻ノ巣遺跡Ⅲ期とⅣ期の中間期の資料①（土手内遺跡）



第246図 鴻ノ巣遺跡Ⅲ期とⅣ期の中間期の資料② (富沢窯跡・名生館遺跡・山前遺跡)

ほぼ同時期頃の土器と考えた。

坏 台状の底部に体部が内弯しながら立ち上がり口縁部が直立するもの (第248図1 : A類)、平底風の底部にやや外傾した体部が付き、口縁部が内傾するもの (第248図2 : B類)、半球形の底部と口縁部との境の内外面に段が付く、幅の広い口縁部が直立して付くもの (第248図3・4 : C類)、浅い半球形の底部と口縁部との境の内外面に明瞭な段がついて、口縁部が直立気味に外傾するもの (第248図5 : D類)、底部から体部にかけて浅い半球形に立ち上がり、体部と口縁部の境の外面に強い稜が形成され、口縁が短く内傾するもの (第248図6 : E類)、小ぶりの半球形の底部に、緩やかに外反する口縁部が付くもので、口縁の下端が内面側に肥厚し、内面だけに強い段ないし稜が形成されるもの (第248図7・8 : F類)、半球形の底部に外反する口縁部がつき、接続部分の屈曲が緩やかなために、口縁から底部にかけてS字状に変化するもの (第248図9・10、第250図1 : G類)、浅い半球形の底部と口縁部の境の内外面にクランク状の明瞭な段が付いて柳葉状の口縁部が強く外反するもの (第248図11~15、第250図2~7 : H類)、浅い半球形の底部と口縁部の境の内外面に段が付いて口縁部が外傾ないし外反するもの (第248図16~17、第250図8 : I類) の9種類がある。A・B・E類は非内黒である。他は非内黒と内面黒色処理されたも



第247図 鴻ノ巣遺跡IV期1段階

のの両方があるが、ほとんどの坏は黒色処理されている。この時期の坏の主体はH類である。

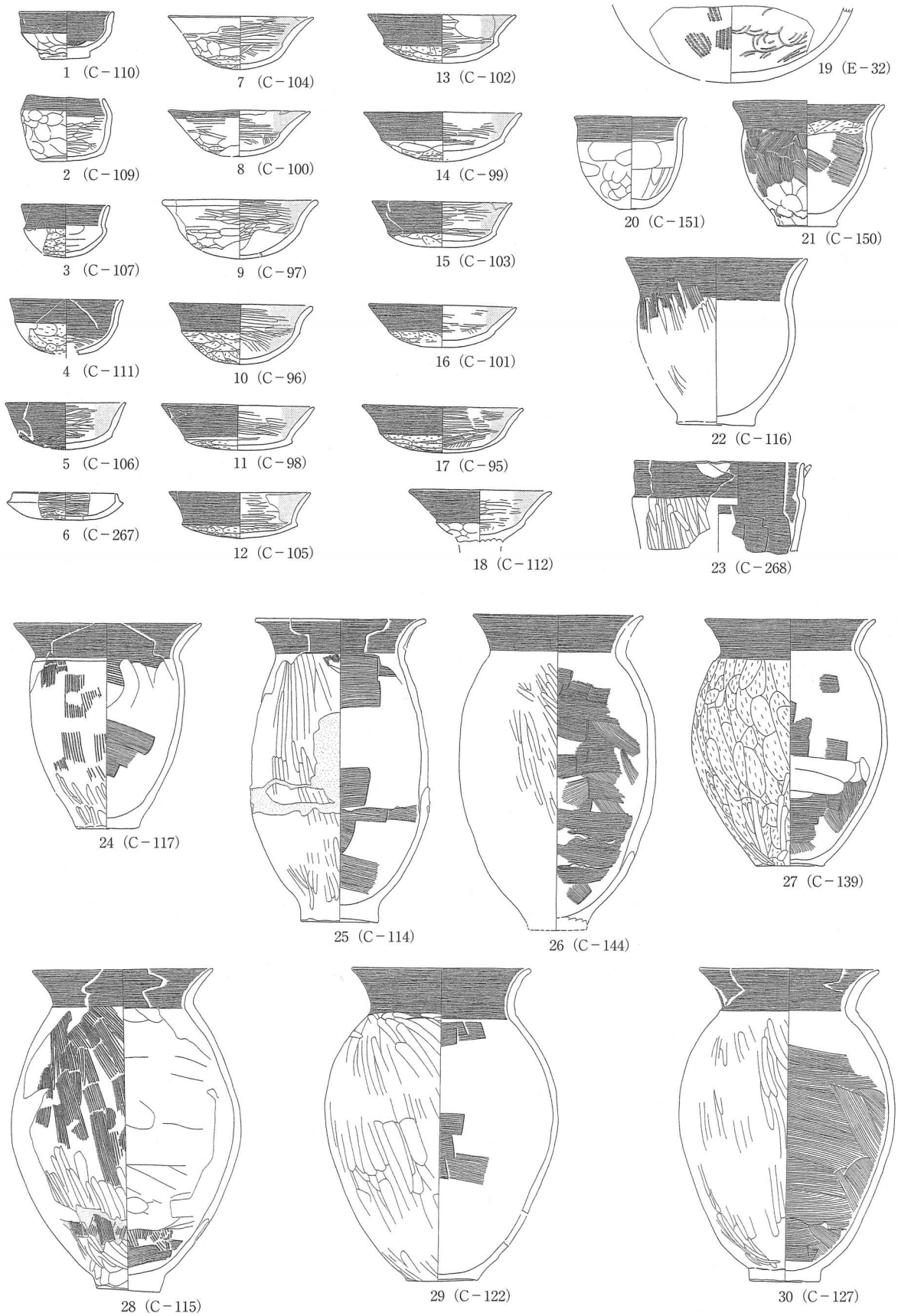
高杯 坏のI類に類似した坏部が2点(第248図18、第250図10)出土している。

鉢 丸底風の底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反するもの(第248図20)と、台状の底部から内弯しながら立ち上がり、体部と口縁部の境が僅かに括れて口縁が緩やかに外反するもの(第248図21・22)がある。

片口土器 外傾して立つ体部と口縁部との境の外面に段がつき、口縁の一部が外側に押し広げられた片口の破片が1点(第248図23)ある。

甕 甕は長胴のもの(第248図24~30他)と体部が球形を呈するもの(第249図1~10他)がある。長胴の甕はIV期1段階と比べると口縁部の幅が狭くなり、体部との境から単純に外反するものに変化する。

IV
期
2
段
階



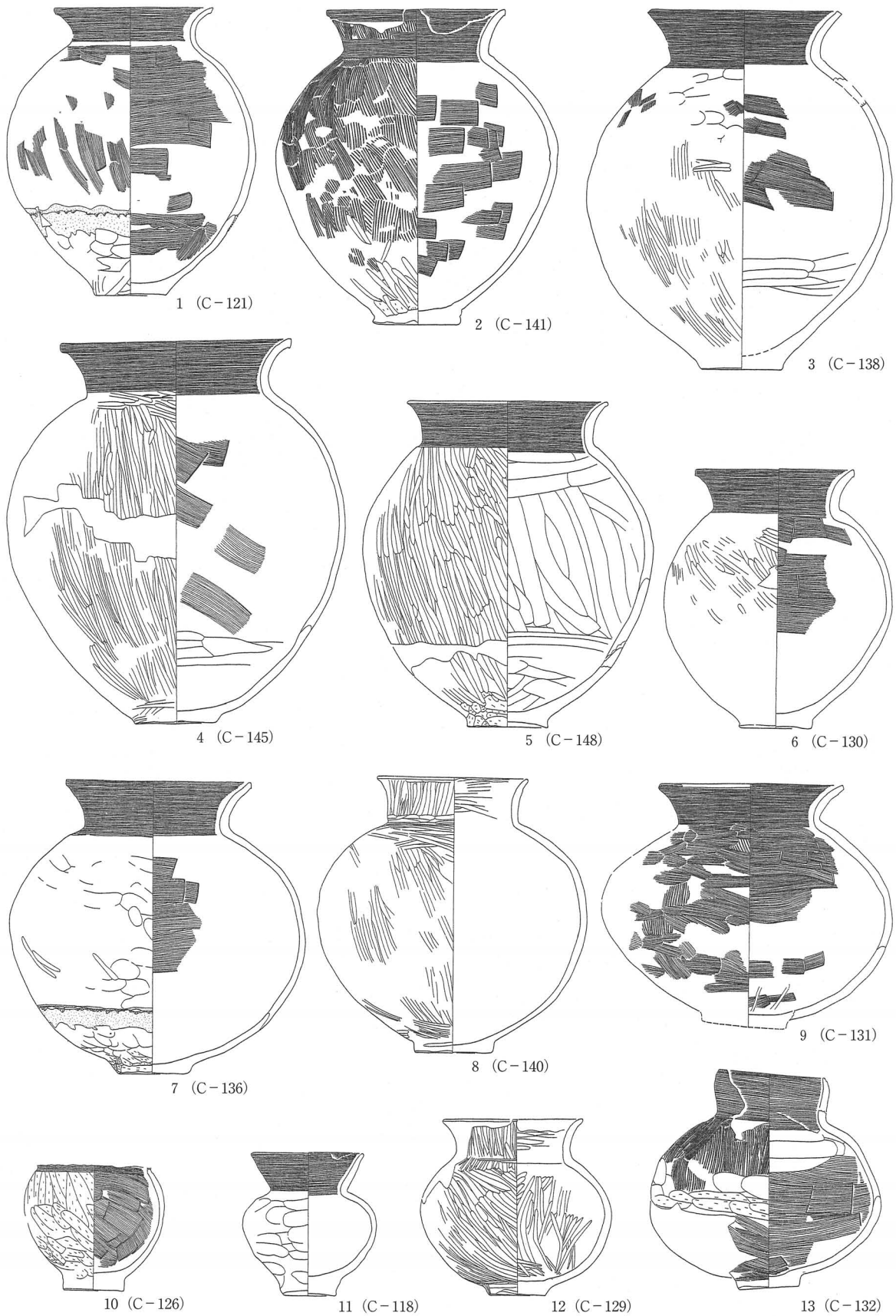
(3b層関係遺構)

3b層土器群

1/6

第248図 鴻ノ巣遺跡IV期2段階①-1

IV
期
2
段
階

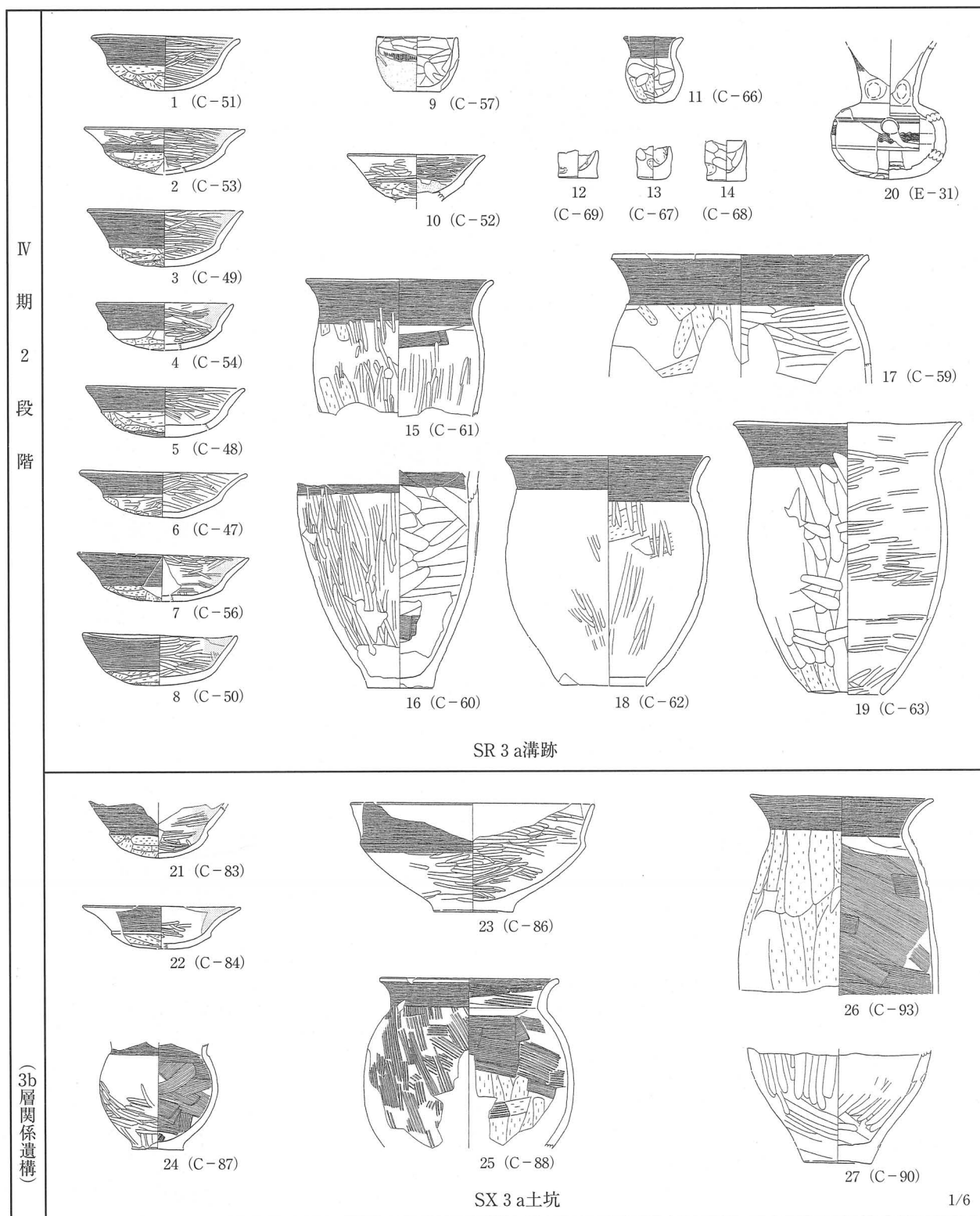


(3b層関係遺構)

3b層土器群

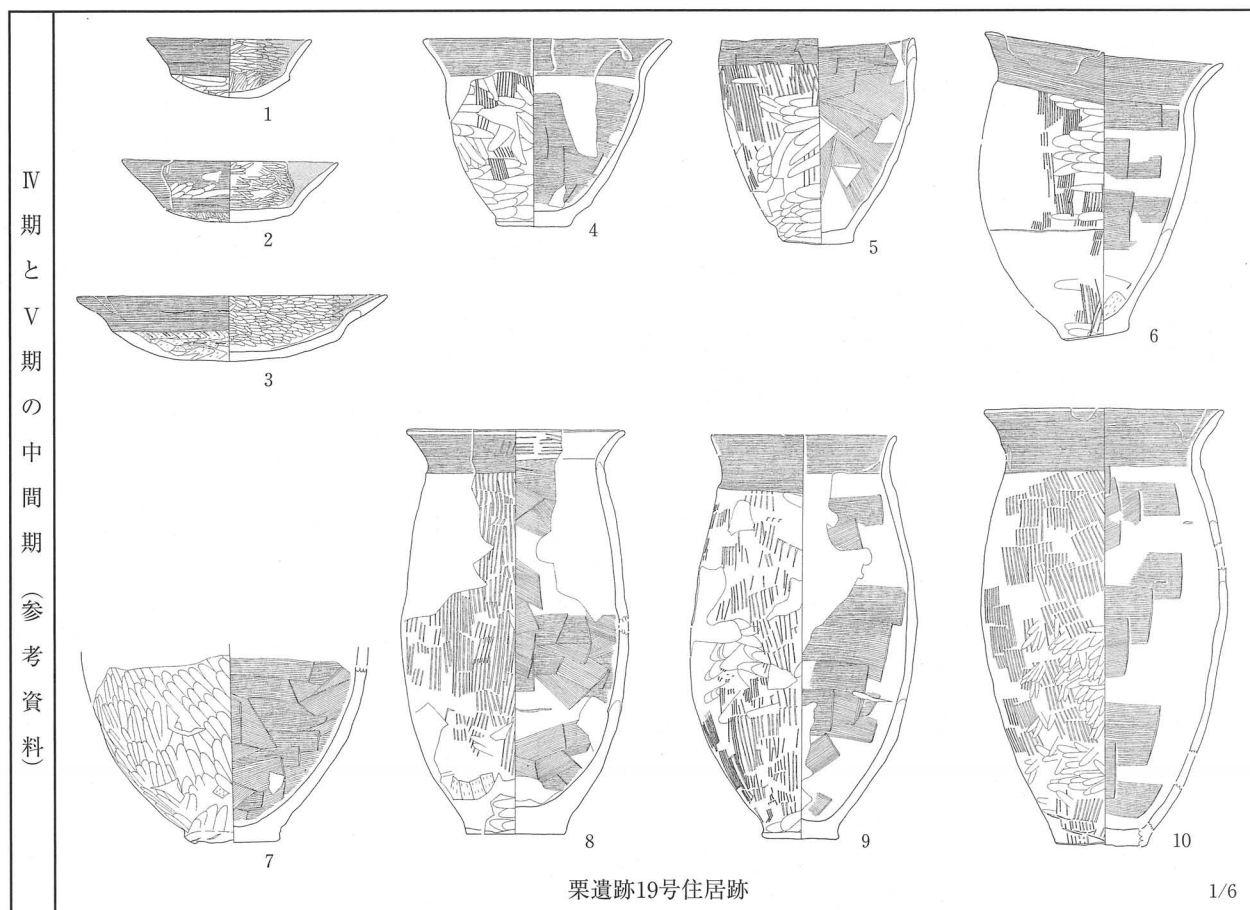
1/6

第249図 鴻ノ巣遺跡IV期2段階①-2



第250図 鴻ノ巣遺跡Ⅳ期2段階②

長胴甕は、小型と大型のものがある。小型の長胴甕は、細身で体部上端に最大径があるもの（第248図24）、胴部の張りが強く、体部中央に最大径があるもの（第248図27）がある。大型の長胴甕は、細身で体部下半に最大径のあるもの（第248図25、第250図26）、同じく細身で体部の中央から上部に最大径があるもの（第248図26、第250図15・16）、胴部に張りがあり、体部中央に最大径があるもの（第248図28）、体部の上部に最大径があるもの（第248



第251図 鴻ノ巣遺跡IV期とV期の中間期の資料(栗遺跡)

図29・30) などがある。この段階になると長胴甕の体部と口縁部の境の外面に段をもつもの(第248図24)が見られるようになるが、まだ一般的特徴とはなっていない。

体部球形の甕は、大きささまざまで、体部の中央よりやや上に最大径があり、肩部に張りを持った縦に長い形態のもの(第249図1～6)が多い。また体部中央に最大径があり、扁平な球形のもの(第249図7～10)もある。体部が球形の甕の口唇部は平坦に仕上げられている。

壺 壺と考えられるものが3点(第249図11～13)出土しているが、形態的に共通性はない。

甕や壺の器面調整にハケメが多用されているものがある(第248図24・28、第249図2・9・13、第250図25)が、全体としては少数である。

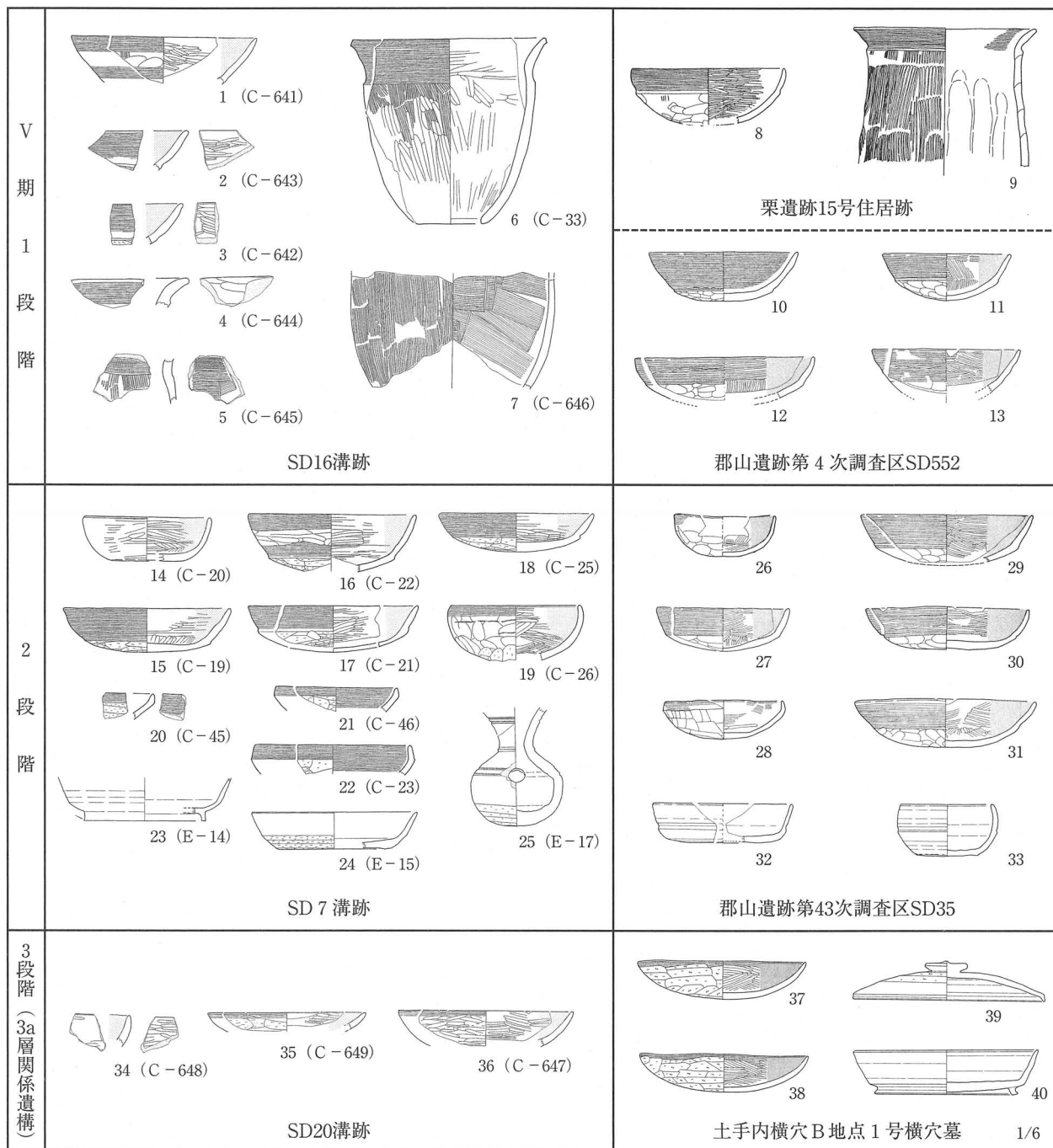
甕 砲弾形の部類であるが、体部上半から口縁部にかけて緩やかに括れ、口縁部が外反するもの(第250図18・19)がある。

この段階にも小型円筒形のミニチュア土器が出土している。またSR3a溝跡からは、扁平な球形の体部に太く長い頸部が付き、孔部頸部上半に細かな波状沈線文が巡る須恵器の甕(第250図20)が出土している。

IV期2段階の類例としては、栗遺跡第10号住居跡(東北学院大学考古学研究部：1979)などがある。

7 IV期とV期の中間期

IV期2段階の土器とV期1段階の土器には、土器の形態や調整技法に差が認められ、この間(3a層が当時の地表面を覆ってからV期1段階の遺構が形成されるまで)にも空白期間の存在が考えられる。この空白期間に相当する土器は、仙台市内では栗遺跡19号住居跡(第251図、工藤・成瀬：1982)のような典型的な栗園式期の土器群で



第252図 鴻ノ巣遺跡V期1～3段階

あると考えられる。

8 V期の土師器

1) V期1段階

SD16溝跡出土の土師器を基準とする。坏・鉢・甕・甔が出土している（第252図1～7）。

坏 丸底で底部と口縁部との境に外面で段差が、内面では軽い屈曲が認められ、口縁部はやや内弯している（第252図1～3）。坏の口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ調整のうえ黒色処理されている。

鉢・甕 体部と口縁部の境には段が形成され、口縁部は外反している（第252図4・5）。

甌 砲弾形で体部と口縁部の境の外面には段が形成され、内外面がヘラミガキ調整されている（第252図6）。

鉢・甕・甌の体部外面はハケメ調整される（第252図5～7）。

2) V期2段階

S D 7 溝跡出土の土師器と須恵器を基準とする。

土師器・坏 大きく分けると2種類がある。Ⅰ類は内面が黒色処理されず、内面がヨコナデ調整されるグループ（第252図20～22）で、関東系土師器と呼ばれているものである。Ⅱ類は内面がヘラミガキのうえ黒色処理されるグループ（第252図14～19）で、在地の土師器である。Ⅰ類には口縁が短く直立するものと（第252図20・21：ⅠA類）とやや長く内傾するもの（第252図22：ⅠB類）がある。Ⅱ類は、底部が平底で底部から体部にかけて丸みをもって直立気味の口縁部となるもの（第252図14：ⅡA類）、底部は丸底で底部と口縁部の境の外面に段が形成され、口縁部は僅かに内弯し、内面は底部と口縁部の境付近が屈曲するが、全体に緩やかに変化するもの（第252図15～18：ⅡB類）、底部から口縁部まで内弯しながら立ちあがるもの（第252図19：ⅡC類）がある。

須恵器・坏 2層出土のE-15（第252図24）は、底径が大きい割に器高が低く、底部から口縁部までやや外傾して立ちあがり、底部と体部下端が回転ヘラケズリ調整されている。高台坏の坏（第252図23）も出土している。

甌 体部は小さな球形で体部と頸部の境は細く括れ、頸部から口縁部にかけてはラッパ状にひろがる（第252図25）。孔付近と頸部に2条の平行沈線が、体部と頸部の境には1条の隆線が巡る。

3) V期3段階

S D 20 溝跡出土の土師器を基準とする。

坏 丸底と考えられる底部から口縁部まで内弯気味に立ちあがるものが3点ある（第252図34～36）。口径に比してやや深いもの（34）と浅いもの（35～36）がある。深いものは内外面ともヘラミガキ調整され、浅いものは口縁部の外面がヨコナデ、内面がヘラミガキ調整されている。いずれも内面は黒色処理されている。

9 各期の編年的位置付けと年代

①Ⅰ期1段階

この段階の土器は壺の口縁部や小型の台付甕などに前型式の特徴が残るが、小型・中型の壺形土器において「口縁高と体高、口縁径と体径とがそれぞれ相等しい」ことや、高坏の「坏底部外側に稜線を形成している」などの器形の特徴から南小泉式（南小泉Ⅱ式）（氏家：1957）と考えられる。この段階の鴻ノ巣遺跡では、長胴の甕と砲弾形の甌は見られない。年代としては、Ⅰ期1段階・2段階は、確実に須恵器が伴うことが確認されていないので、5世紀中頃以前に位置付けられるものと考えられる。具体的な年代を示す資料はないが、Ⅰ期1段階はSⅠ7⇒SⅠ128⇒SⅠ6という重複があり、ある程度の時間幅が想定されることから5世紀前葉の年代幅を想定したい。

②Ⅰ期2段階

この段階にも、壺の口縁部に前型式の特徴が残る。坏の形態において1段階からの変化が認められるが、高坏や小型壺の形態は1段階と区別できないことから、南小泉式期内的における変化と考えられる。年代はⅠ期1段階とⅠ期3段階との関係から5世紀中葉の前半頃と考えられる。

③Ⅰ期3段階

小型壺が消滅し、中型壺の出現することが最大の特徴となる。中型壺は引田式の標識となった古川市引田遺跡の出土の「口縁内反し、口縁径は体径に比して著しく小となり口縁高も体高の割りに小である」という特徴（氏家：

1957) に一致することから、本段階の土師器は氏家氏の編年の引田式に相当すると考えられる。年代としては、南小泉遺跡でカマドが敷設されたⅡ期と同期頃の住居跡から、TK208型式と平行すると考えられる須恵器が出土している(五十嵐康洋:1998)ことから、それに先行するTK216型式に相当する5世紀中葉後半頃と考えられる。

④Ⅱ期

この段階になると、鴻ノ巣遺跡でも住居にカマドが敷設されるようになる。中型壺が継続し、口縁部の径と高さがさらに小さく・低くなるが、土器型式としてはⅠ期3段階同様に引田式に相当する。堅穴住居跡にカマドが敷設され、かつ口縁部の小さくなった中型の壺が出土した例としては南小泉遺跡第26次調査SI-5堅穴住居跡(五十嵐康洋:1998)がある。この住居跡からは須恵器脚付有蓋壺が出土しており、壺については、裏町古墳出土の台坏壺との類似性からTK208型式並行と位置付けられており、年代としては5世紀後葉の前半頃と考えられる。

なお、カマド敷設の初期の例は、鴻ノ巣遺跡Ⅰ期2段階に相当する土師器を出土した南小泉遺跡第13次調査1号住居まで遡るようである(渡辺:1985)。また、福島県郡山市清水内遺跡(高松他:1999)でも小型壺を出土する住居跡のほとんどが炉を伴うものであるが、8区7号住居は、鴻ノ巣遺跡Ⅰ期2段階に相当する土師器とともに小型壺も多数出土しているがカマドが敷設されている。この住居からは中型壺の体部の破片も出土している。

⑤Ⅲ期

住居跡での土師器の組合せは不明であるが、SD23A溝跡の土器は、薄手で平底風丸底の坏の出現、平坦口唇の甕の出現、高坏の小型化などの変化が認められ、さらに中型壺の消滅というⅡ期に後続することを示す変化が確認されている。しかし、高坏が一定量出土していることから、高坏が消滅する「Ⅲ期とⅣ期の中間期」の土器群とは区別され、これに先行すると判断される。前後の時期との関係から、5世紀後葉の中頃と考えられる。土器形式としては、他の器形の土師器と比べて、最も判断材料とし易い中型壺の共伴を引田式の基準とすると、この段階の土器は引田式と区分されるが、坏や甕などにはⅡ期のものと区別できないものも多数存在し、次段階に特徴的な外面の体部と口縁部の境に段がつき、幅が広く直立ないし僅かに内弯する口縁部の坏がまだ存在しないことから引田式の範疇で捉えておきたい。

⑥Ⅲ期とⅣ期の中間期

土手内遺跡SI-4・8住居跡(熊谷・主浜・小川:1992)と富沢窯跡第2次床面出土土師器(渡辺泰伸他:1984)は、高坏が消滅することでⅢ期に後続し、Ⅳ期に繋がる。外面の体部と口縁部の境に段がつき、幅が広く直立ないし僅かに内弯する口縁部の坏が出現することでⅣ期に先行する。年代としては、富沢窯跡の年代が、裏町古墳より須恵器の型式として1型式くらい新しいと考えられている(藤沢:1987)ことから、TK23型式に相当する5世紀後葉の後半頃と考えられる。なお、Ⅲ期とⅣ期の中間期の類例資料とした名生館遺跡SK430土坑(白鳥・後藤:1986)と合戦原遺跡第1号住居跡外周溝(岩見・佐藤:1991)から出土した須恵器坏は、TK47型式に比定され、5世紀末から6世紀前葉頃に位置付けられることから、この時期は5世紀後葉の後半から6世紀前葉頃に相当する。土器型式としては、多くの坏などは南小泉式期以来の前型式の特徴を残しているが、Ⅳ期に繋がる坏が出現することや、鉢の出現・甕の長胴化などに着目し、Ⅳ期の初期的状況を示すものとして住社式の範疇で捉えておきたい。(註1)

⑦Ⅳ期1段階

Ⅲ期とⅣ期の中間期とした土器群とⅣ期の土器群とでは、坏の器形や内面黒色処理の一般化、長胴甕の普遍化などの大きな相違が生じているが、これまで仙台市周辺で調査された古墳時代の遺構から出土した土師器をもって、このギャップを埋めることは困難であることから、この変化は急激なものであったと考えられる。

Ⅳ期1段階の土器は、坏の特徴などから氏家氏の編年の住社式にあたる。この時期の土器の年代は、Ⅳ期1段階と類似する口縁部の幅が広く底部と口縁部の境に段が付いて口縁が直立する杯や、底部と口縁部の境が強く屈曲

時期	坏	高坏	小・中型壺	鉢	甕	甗
I 期	1 段階					
	 1	 2	 3	 4	 5	 6
	 7	 8	 9	 10	 11	 12
II 期	2 段階					
	 13	 14	 15	 16	 17	 18
	 19	 20	 21	 22	 23	 24
III 期	3 段階					
	 25	 26	 27	 28	 29	 30
	 31	 32	 33	 34	 35	 36
IV 期	1 段階					
	 37	 38	 39	 40	 41	 42
	 43	 44	 45	 46	 47	 48
III 期とIV 期の中間期	2 段階					
	 49	 50	 51	 52	 53	 54
	 55	 56	 57	 58	 59	 60
IV 期	3 段階					
	 61	 62	 63	 64	 65	 66
	 67	 68	 69	 70	 71	 72
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 73	 74	 75	 76	 77	 78
	 79	 80	 81	 82	 83	 84
IV 期	3 段階					
	 85	 86	 87	 88	 89	 90
	 91	 92	 93	 94	 95	 96
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 97	 98	 99	 100	 101	 102
	 103	 104	 105	 106	 107	 108
IV 期	3 段階					
	 109	 110	 111	 112	 113	 114
	 115	 116	 117	 118	 119	 120
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 121	 122	 123	 124	 125	 126
	 127	 128	 129	 130	 131	 132
IV 期	3 段階					
	 133	 134	 135	 136	 137	 138
	 139	 140	 141	 142	 143	 144
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 145	 146	 147	 148	 149	 150
	 151	 152	 153	 154	 155	 156
IV 期	3 段階					
	 157	 158	 159	 160	 161	 162
	 163	 164	 165	 166	 167	 168
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 169	 170	 171	 172	 173	 174
	 175	 176	 177	 178	 179	 180
IV 期	3 段階					
	 181	 182	 183	 184	 185	 186
	 187	 188	 189	 190	 191	 192
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 193	 194	 195	 196	 197	 198
	 199	 200	 201	 202	 203	 204
IV 期	3 段階					
	 205	 206	 207	 208	 209	 210
	 211	 212	 213	 214	 215	 216
III 期とIV 期の中間期	3 段階					
	 217	 218	 219	 220	 221	 222
	 223	 224	 225	 226	 227	 228
IV 期	3 段階					
	 229	 230	 231	 232	 233	 234
	 235	 236	 237	 238	 239	 240

第253図 鴻ノ巣遺跡 I 期～IV 期土器変遷図 (第231図～第250図から抜粋)

する内黒の坏、口縁部の幅の広い長胴甕などの土師器が出土している山形県物見台遺跡（阿部：1987）S T 1 堅穴住居跡から、MT 15型式の須恵器坏が出土しているので、6世紀前葉頃と考えられる。

⑧Ⅳ期2段階

土師器坏の特徴は1段階と共通するものが多く、氏家氏の編年では住社式にあたる。S R 3 a 溝跡から出土した甕は、T K 10型式に近似することから、6世紀中葉頃と考えられる。

⑨Ⅳ期とⅤ期の中間期

氏家氏の編年の「栗圀式」にあたり、栗遺跡の多くの住居跡がこの時期に相当すると考えられる。栗遺跡2・5号住居跡からはT K 209型式（7世紀前葉頃）の須恵器坏が出土している（工藤・成瀬：1982）。

⑩Ⅴ期1段階

S D 16溝跡の坏と栗遺跡から出土した坏と比較すると、杯の底部と口縁部との境に内外面で段差・屈曲が小さく、口縁部が内弯傾向にある点は、栗遺跡Ⅲb期（工藤：1982）のS I ⑮堅穴住居跡の土器137・S I ⑨の土器141と類似し、栗遺跡出土の土師器の中では最終段階頃のものと考えられる。類例としては、7世紀後葉に位置付けられている仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙のS D 552溝跡出土遺物（木村他：1985）がある。また、村田晃一氏による栗圀式土器の編年では、Ⅱ期6段階ないしⅡ期7段階にあたり、7世紀後半に位置付けられる（村田：1998）。以上のことから、Ⅴ期1段階の土師器については7世紀後葉頃と考えられる。

⑪Ⅴ期2段階

Ⅴ期2段階の土師器のうち、坏ⅠA・B類は、南小泉遺跡第22次調査S D 3溝2層中からまとまって出土しており、一緒に出土した土師器や須恵器から6世紀末葉の年代が与えられている（斎野：1994）。ⅠB類の坏は、仙台市郡山遺跡S I 1299堅穴住居跡から、国分寺下層式（氏家和典：1967）とされる坏と共に出土している（斎野：1991）。また、大和町一里塚遺跡ではBⅡ1類・BⅡ2類（それぞれ本遺跡ⅠB類・ⅠA類に類似）と分類される坏にも類例があり、他の土師器や須恵器との関係から7世紀後葉から8世紀初頭頃の年代が与えられている（三好秀樹：1999）。矢本町赤井遺跡では、7世紀後半から後葉に位置付けられているⅠ期段階の遺構に伴う「関東系土師器B群」の杯O・坏R（佐藤敏幸：2001）に類例が求められる。したがってⅠ類の土師器については、6世紀末葉頃には出現し、8世紀初頭頃まで存続していたことが考えられる。

土師器坏ⅡA類の坏は、氏家氏の国分寺下層式第Ⅲ類にあたり8世紀後半と考えられる。ⅡB類の坏は、Ⅴ期1段階の栗圀式から国分寺下層式のⅠ類ないしⅡ類にあたり、郡山遺跡のⅡ期官衙の外郭を区画するS D 35溝跡から出土しているものに類似する。

須恵器の坏は、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられている仙台市大蓮寺窯跡5号窯跡（篠原：1993）や、多賀城跡の創建期の瓦を焼成したことから8世紀前半と考えられている木戸窯跡群（辻：1984）の製品と共通することから、概ね8世紀の前半頃と考えられる。甕E-7（第45図12）は、MT 21型式前後の時期のものとみられ、7世紀末から8世紀前葉頃のものと考えられる。

以上のように、Ⅴ期2段階の土器は、ⅡA類としたC-20を除くと、7世末から8世紀前葉頃の年代が考えられる。同じような組合せと年代の土器は、市内では中田南遺跡古代第Ⅲ群土器（太田：1994）や欠ノ上Ⅱ遺跡Ⅰb期土器群（工藤：2000）などにも認められる。

⑫Ⅴ期3段階

Ⅴ期3段階と類似する資料は、仙台市土手内横穴B地点1号横穴墓から出土しており、共伴した須恵器の高台付坏と蓋は8世紀初頭から前葉の年代が与えられている（小川：1992）。S D 20溝跡は、Ⅴ期2段階のS D 7溝跡を切っていることから、Ⅴ期3段階の年代については、8世紀前葉ころを中心とした時期と考えられる。土器型式としては国分寺下層式として捉えておきたい。

以上本節では、南小泉式期から国分寺下層式期までの鴻ノ巣遺跡における非ロクロ土師器の変遷を、空白期間を市内の他遺跡の出土例で補完しながら概観した。特に古墳時代中期にあたるⅠ期1段階からⅢ期にかけては、5段階の変遷を追うことができた。

今回の鴻ノ巣遺跡第7次の調査による、遺構の層位的区分及び土器の形態的特徴と器種組成の分析によって、氏家氏の「南小泉式」と「引田式」とを小型壺と中型壺の有無等によって区別できることが確認された。このことから、白鳥良一氏・加藤道男氏が1974年の鴻ノ巣遺跡調査報告書（白鳥良一・加藤道男他：1974）における考察で述べた「住居跡出土の土師器およびそれと特徴を同じくする遺物包含層出土の土師器は形式的なまとまりをもつ一群の土器として把握することが可能」（同：241頁）で、「本群の土師器の中から引田式に類似する土器だけを抽出して分離することには、多くの無理がある。」（同：243頁）として「本群の土師器は（中略）引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当」（同：243頁）としたことについては再考が必要と考えられる。本調査の細分の追認を含めて改めて「南小泉式」と「引田式」の型式区分と変遷・分布等についてさらに検討が必要と思われる（註2）。

宮城県内あるいは東北南部の古墳時代中期土師器の編年とその細分については、丹羽茂氏（丹羽：1983）、辻秀人氏（辻：1989）、加藤道男氏（加藤：1989）、藤沢 淳氏（藤沢：1992）などをはじめ、多くの論考があるが、編年各期・各器種及びその年代観と鴻ノ巣遺跡時期区分との関係については、本報告では十分に検討することができなかった。

Ⅰ期1段階からⅢ期及びⅢ期からⅣ期の中間期とした時期には、各期を通して類似した形態の坏が出現し、坏形土器だけでは、型式認定や年代を明らかにすることができない場合も考えられるが、なお、特徴を細かく分析する必要がある。南小泉遺跡など周辺の遺跡との器種組成と形態変化の比較も今後の課題である。また、年代観についても須恵器などの共伴資料の増加を待って再検討しなければならないものである。

第2表 鴻ノ巣遺跡の非ロクロ土師器の時期区分

時期区分	基準遺構	同期の遺構	型式名	年代	同期の類例遺構		
I 期 1 段階	SI 6	SI 7・12・17・18、 SD36、SK128、SX12	南小泉式	5 世紀前葉	SD26	SI14 SD29	SD45
I 期 2 段階	SI 8	SI14、SD34、SK132		5 世紀中葉前半		SK114 SX 9	
I 期 3 段階	SI11	SI 9	引田式	5 世紀中葉後半	SK104・135		
II 期	SI10・13	宮城県調査SI 1・2		5 世紀後葉前半			
III 期	SD23A－1・2 層	SI15	(引田式?)	5 世紀後葉中頃			
III 期と IV 期の 中間期	(土手内遺跡SI 4・8、富沢窯跡第 2 次床面) (名生館跡SK430・合戦原遺跡SI 1 外周溝)		(住社式?)	5 世紀後葉後半 5 世紀末～6 世紀前葉			
IV 期 1 段階	SR3b、SI 5－1 層		住社式	6 世紀前葉			
IV 期 2 段階	3 b 層土期群 SR3a・SX3a			6 世紀中葉			
IV 期と V 期の 中間期	(栗遺跡)		栗罎式	7 世紀前葉～後葉			
V 期 1 段階	SD16		栗罎式	7 世紀後葉			
V 期 2 段階	SD 7		栗罎式～ 国分寺下層式	7 世紀末～8 世紀前葉			
V 期 3 段階	SD20		国分寺下層式	8 世紀前葉			